

呼吸器内科

主 な 体 制

医師体制

副院長（呼吸器内科科長・部長）：吉見 誠至

診療技術部長（内科部長）：原田 孝

日本学会等認定資格			
日本内科学会総合内科専門医	2	吉見 誠至・原田 孝	
日本呼吸器学会呼吸器専門医・指導医	2	吉見 誠至・原田 孝	
臨床研修指導医	2	吉見 誠至・原田 孝	

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

気管支喘息、COPD、間質性肺炎、肺癌、呼吸器感染症、睡眠時無呼吸症候群など様々な呼吸器疾患の外来・入院診療を行った。

入院患者数、疾患の内訳は2021年度と同様の傾向であった。高齢者の誤嚥性肺炎を診る機会が増えている。この数年感じていることであるが、間質性肺疾患の入院は比較的多かった印象である。重症の入院呼吸不全症例に対してネーザルハイフローで管理する機会は確実に増えている。

禁煙外来は、禁煙補助剤バレニクリンの出荷停止が続いている影響もあり、受診希望者がいなかった。

気管支内視鏡、CTガイド下肺生検、ポリソムノグラフィの入院は、従前同様にクリニカルパスを活用した。

内科系の外来で撮影された胸部レントゲンのダブルチェックは今まで通り行った。

【2022年度実績】

HOT新規導入：51件

CPAP新規導入：14件

在宅NPPV新規導入：7件

気管支内視鏡：22件

入院総数：396人

内訳（DPC病名上位10疾患）：細菌性肺炎107人、肺がん（疑い含む）65人、間質性肺炎64人、誤嚥性肺炎25人、COPD22人、気胸13人、睡眠時無呼吸症候群11人、膿胸8人、心不全8人、敗血症7人、

■2023年度の目標・課題

- ・当科での入院・外来化学療法において、引き続き多職種との情報共有を積極的に行い、診療の質の向上をはかる。カンサーボードを立ち上げる。
- ・高齢者が増えており、引き続き訪問看護など社会的な医療資源との連携を積極的にはかっていく。

内分泌内科

主な体制

医師体制

科長（部長）： 荒木 修

日本学会等認定資格			
日本臨床検査医学会 臨床検査専門医・評議員	1	荒木	修
日本内科学会 認定内科医	1	荒木	修
日本糖尿病学会 糖尿病専門医・研修指導医	1	荒木	修
日本糖尿病協会 療養指導医	1	荒木	修
日本内分泌学会 評議員	1	荒木	修
日本甲状腺学会 評議員	1	荒木	修
臨床研修指導医	1	荒木	修
緩和ケア研修修了	1	荒木	修
難病指定医	1	荒木	修
小児慢性特定疾病指定医	1	荒木	修

活動報告

■2022年度のまとめ

【診療内容】

外来

糖尿病内分泌外来8単位、甲状腺専門外来1単位、糖尿病初診外来4単位、フットケア外来1単位、糖尿病性腎症透析予防指導・糖尿病療養指導（随時）

検査

糖尿病・内分泌疾患に対する各種負荷試験

入院

糖尿病教育入院、血糖コントロール入院、内分泌精査入院（原発性アルドステロン症、下垂体疾患、副腎疾患など）、周術期・感染症・ステロイド治療・糖代謝異常妊婦周産期などにおける血糖管理（各科からのコンサルテーション）対応

【糖尿病チーム活動等】

- ・糖尿病療養チーム（Team Diabetes、2007年発足）
日本糖尿病療養指導士17人、群馬県糖尿病療養指導士24人
糖尿病教室の運営や企画、職員啓発、学会発表など
糖尿病チームミーティング月1回
透析予防指導カンファレンス隔月1回
- ・外来糖尿病教室（通常年間4回。今年度は開催を見合わせ、冊子の作成・配布）
- ・しののめ会（利根中央病院糖尿病友の会昭和63年創立）、総会・学習会（今年度は開催を見合わせ、紙上での年次報告）
- ・群馬県糖尿病セミナー・糖尿病ウォークラリー

糖尿病診療においては前年度同様、インスリンポンプ療法や持続血糖測定器を使用した糖尿病治療、透析予防指導やフットケア外来の実施など、あらゆる治療困難な症例や重症合併症症例の治療に対応する体制を維持した。入院患者向けに1週間の糖尿病教室を前年同様、月2回のペースで開催した。院外からの紹介や健診後の初診患者対応に際しては、総合診療科と連携し診療した。

甲状腺疾患、原発性アルドステロン症、下垂体機能不全、ACTH単独欠損症、副腎不全、クッシング症候群などの内分泌疾患の診断治療や内分泌代謝緊急疾患である急性副腎不全、粘液水腫性昏睡、糖尿病性ケトアシドーシス、高血糖高浸透圧症候群などの診断治療にあたった。

糖尿病患者数増加に伴い、外来待ち時間が長く外来予約も困難な状況であったが、病診連携を図り院外（利根中央診療所・片品診療所含む）への紹介を増やすことや初診外来枠を複数設けることで対応にあたった。常勤医1人の体制では緊急疾患や入院中の糖尿病合併周術期・周産期患者の血糖管理などに十分対応しきれない局面も多くあり、総合診療科・内科各専門科をはじめ各診療科に併診いただき診療を行なった。初期研修医、総合診療科及び内科専攻医各位に糖尿病内科での研修をしていただいた。

■2023年度の目標課題

内分泌・糖尿病領域において引き続き常勤医1人の体制であり、群馬大学からの外来支援を受け診療を行っている。患者数の増加に対する病診連携（紹介・逆紹介）の強化や、院内各科との診療連携（周術期・周産期・感染症・ステロイド治療時など）、内分泌・糖尿病領域の専門性の高い患者の入院受け入れ体制、糖尿病診療チームのスキルアップ等の課題に継続して取り組みたい。新型コロナウイルス感染症の影響下、院内各診療科、栄養課、リハビリ科、薬剤部、診療支援部など各部署と連携し、入院治療から退院後の生活の場での安定した療養まで継続して行えるよう、引き続き質の高い糖尿病・内分泌診療を提供したい。このためにも初期ならび後期研修医の糖尿病内科研修を充実させ、スキルアップを図れるよう努めたい。

消化器内科

主な体制

医師体制

科長(部長) : 山田 俊哉
 医長 : 小林 剛
 医長 : 深井 泰守

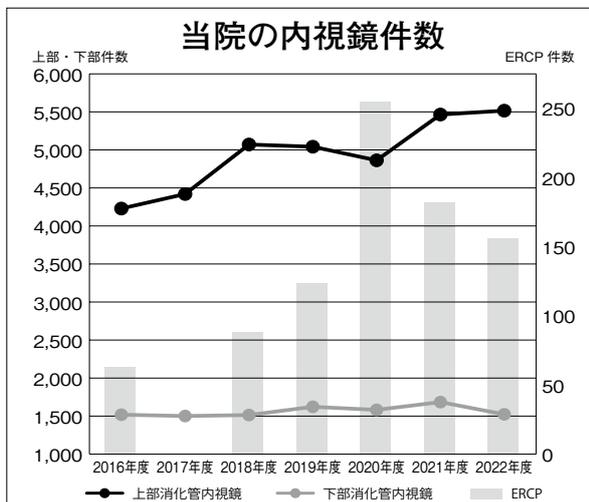
日本学会等認定資格

日本消化器病学会 消化器病専門医	3	山田 俊哉・小林 剛・深井 泰守
日本消化器病学会 消化器病指導医	1	山田 俊哉
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡専門医	3	山田 俊哉・小林 剛・深井 泰守
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡指導医	1	山田 俊哉
日本内科学会 総合内科専門医	2	山田 俊哉・小林 剛
日本内科学会 認定内科医	1	深井 泰守
日本肝臓学会 肝臓専門医	1	小林 剛
日本プライマリケア連合会 認定医	1	小林 剛
臨床研修指導医	1	山田 俊哉

活動報告

■2022年度のまとめ

上部・下部消化器内視鏡検査については、コロナ禍が続いているものの、例年通りの内視鏡室の稼働を行い、totalの件数は上部消化管内視鏡検査5516件、下部消化管内視鏡検査1523件であった。ERCPが必要な胆膵疾患も数多く当院に集まる状態で、ERCP件数156件と前年度よりは減ったものの



数多く行っている。また、2022年度から消化管専門医の深井泰守先生が赴任され、ESD(内視鏡の粘膜下層剥離術)を導入し、早期胃癌などに対するESDを14件行った。深井先生はIBDの専門であり、IBDの診療強化がはかられた。肝疾患も増加しており、食道静脈瘤に対するEIS 8件、EVL 8件も行った。

■2023年度の目標・課題

2023年度は常勤肝臓専門医が不在となり消化器内科2人体制となるが、年々消化器疾患患者数や内視鏡検査・治療数が増加しており、少人数体制ではあるが、総合診療科・他内科系医師・外科医師と力を合わせて可能な限り地域に貢献できればと考えている。また、今後、超音波内視鏡検査を導入していき、当地域での胆道・膵臓癌の早期発見などにも力を入れていければと考えている。また、当院は日本消化器内視鏡学会指導施設と日本消化器病学会認定施設であり、今後、若手医師への指導にも力を入れていきたい。

循環器内科

主な体制

医師体制

科長(部長)	:	近藤 誠
医員	:	山口 実穂
医員	:	野尻 翔
医員	:	滝沢 大樹 (外部研修中)

日本学会等認定資格		
日本内科学会 総合内科専門医	1	近藤 誠
日本内科学会 内科専門医	1	山口 実穂
日本循環器学会 循環器専門医	1	近藤 誠
日本心血管インターベンション治療学会 心血管カテーテル治療専門医	1	近藤 誠
臨床研修指導医	1	近藤 誠

活動報告

■2022年度 診療概況

2019年4月より内科専門研修プログラム専攻医を受け入れている。内科専門研修プログラムを終了した1人は内科専門医の資格を取得し、その後心肺運動負荷試験、心臓超音波検査の外部研修を経て、今年度当院へ再赴任した。今後は循環器内科専門医取得に向けて研修中である。もう1人は循環器内科医として当院での勤務を継続し、内科専門医資格の申請中である。また内科専門研修プログラムに在籍中の後期研修医は、県内の循環器内科の基幹施設で外部研修を行っている。当院循環器内科では、スタッフの実力強化に努め、今後の利根沼田地域での循環器診療の拡充を目指している。

今年度からの人員強化に伴い、心肺運動負荷試験や心臓カテーテル検査のキャパシティが増え、必要に応じた専門的な検査、治療を積極的に進めている。

具体的な診療内容としては、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、心不全、弁膜症、不整脈、閉塞性動脈硬化症などの循環器疾患の診断と治療を、できるだけ地域内で完結することを目指し診療を行っ

ている。特に心疾患の予後とQOL改善を目的とし、院内に多職種で構成する心臓リハビリテーション（心リハ）チームを結成し、入院中から外来に連続した心リハに取り組んでいる。また「心不全パナミック」と言われるほど、心不全患者が増加している現状に対し、早期発見、早期介入を目指す、「心不全早期発見プロジェクト」を立ち上げ、地域の開業医や診療所、院内他科との連携を強化して、心不全治療に取り組んでいる。

<診療実績>

2022 / 4 / 1 ~ 2023 / 3 / 31	
CAG(Coronary Angiography)	62件
PCI(Percutaneous Coronary Intervention)	50件
AMI	15件
UAP	10件
下肢PTA(Percutaneous Angioplasty)	6件
ペースメーカー植え込み術	13件
ペースメーカー交換術	7件
植え込み型心電計	3件
冠動脈CT	20件
CPX(心肺運動負荷試験)	139件
心臓リハビリテーション	入院 145件
	外来 143件

<体制の整備>

- 日本循環器学会研修関連施設認定
循環器専門医育成のため、施設認定を受けた。
- 血管撮影装置更新
導入した血管撮影装置はCアームが多方向に動く機構を備え、全身の血管をスピーディーかつ安全に検査治療することが可能となった。
- 冠血流予備量比（FFR: fractional flow reserve）に加え、Resting Full-Cycle Ratio（RFR）導入
適正なPCIを行うため冠動脈狭窄病変前後の冠動脈内圧を測定し心筋虚血の有無を評価する。薬剤負荷が必要なFFRと、薬剤負荷が必要でないRFRを併用することで、より容易に心筋虚血の評価をすることが可能となった。
- 60MHz血管内超音波検査装置導入
60MHzの血管内超音波検査を導入したことにより、血管内の血栓やプラークをより詳細に観察することが可能となった。
- 冠動脈CT
80列CTを用いて外来検査として冠動脈CTを実施している。冠動脈CTでは、非侵襲的に冠動脈狭窄を評価でき、同時に血管壁の石灰化や動脈硬化プラークを観察することが可能である。
- CPX（心肺運動負荷試験）
心肺運動負荷試験を実施することで、慢性心不全や虚血性心疾患の患者が安全に活動可能な運動強度

の閾値を判定することができ、日常生活における活動、行動制限を決定することができる。また、心臓リハビリテーションや自宅での運動療法を行う際の適切な運動強度を決定することができる。

• 心臓リハビリテーション

医師、看護師（病棟、外来）、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、管理栄養士、ソーシャルワーカー、医療事務の多職種で心臓リハビリテーションチームを構成し、慢性心不全、虚血性心疾患、閉塞性動脈硬化症、心臓大血管術後の患者に対して、心臓リハビリテーションを実施している。心臓リハビリテーションを行うことで、心疾患患者のQOL改善とともに、予後の改善が期待できる。

• 病棟エルゴメーター導入

心臓リハビリテーションを行う中で、患者の自主訓練を習慣づけるため、病棟での空き時間に理学療法士に処方された運動処方を実践するためのエルゴメーターを病棟内に設置した。

• 心不全早期発見プロジェクト「心不全ダイレクト検査」

心不全症状が出現する前の、心不全ステージA/Bの患者を早期に発見し、適切な早期介入を開始することで、利根沼田地域の心疾患患者の予後改善を目指している。「心不全ダイレクト検査」という指定の用紙を当院地域連携室にFAXすることで容易に紹介可能となる仕組みを導入した。

腎臓内科

主な体制

医師体制

科長（医長）：岡部 智史
 医員：大塚 瑛公

日本学会等認定資格		
日本内科学会 認定内科医	2	岡部 智史・大塚 瑛公
日本腎臓学会 腎臓専門医・指導医	1	岡部 智史
日本透析医学会 透析専門医・指導医	1	岡部 智史
日本透析医学会 透析専門医・指導医	1	大塚 瑛公
臨床研修指導医	1	岡部 智史

活動報告

■2022年度のまとめ

腎臓内科は、2016年度より常勤一人体制であったが、2022年4月からは大塚医師が着任し、常勤二人体制となった。入院・外来では、急性腎障害・糖尿病性腎症をはじめとするネフローゼ症候群・維持透析導入・透析合併症など、様々な疾患の診療を行った。2019年12月からは新たに月水金午後クールを創設し、月水金3クール・火木土1クールの計4クールに維持透析枠を拡大し、2020年度には定期外来維持透析患者数を10人増加させることができた。また、エンドトキシン吸着療法や緊急透析などの、緊急の血液浄化療法もこれまでと同様に施行できた。そのほか、シャント閉塞ゼロを目標に、シャントPTAを精力的に行い、年間40件程度を施行した。

■2023年度の目標・課題

2023年度については、これまでと同様に、維持透析を中心として、現行の診療体制を維持していきたいと思う。

総合診療科

主な体制

医師体制

常勤スタッフ：	診療科長（部長）	鈴木 諭
	診療副科長（医長：研修・医学生実習担当）	宇敷 萌
	診療副科長（医長：外来・他科連携担当）	中村 大輔
	医長（高崎中央病院出向中）	比嘉 研
	医長（救急科兼任）	小林 喜郎
	医長（フェロー）	石渡 彰
	医長（フェロー）	書上 奏
	チーフレジデント（専攻医・初期研修医教育）	渡邊 健太
	診療看護師	安部 優子
	診療看護師	南川美由紀
非常勤スタッフ：	名誉院長（利根中央診療所所長）	大塚 隆幸

日本専門医機構総合診療専門研修プログラム：

専攻医	PGY 6	周佐 峻佑（北毛病院出向研修）
専攻医	PGY 5	高橋 朋宏（高崎中央病院出向研修）
専攻医	PGY 5	保田 和奏（前橋協立病院出向研修）
専攻医	PGY 4	岩出 良介（利根中央病院内科／小児科研修）
専攻医	PGY 3	吉田 卓生
専攻医	PGY 3	植野 貴也（北毛病院出向研修）

日本専門医機構総合内科専門研修プログラム：

専攻医	PGY 4	井上 錬太郎
-----	-------	--------

外部総合診療専門研修／総合内科連携プログラム：

専攻医	PGY 5	白井 絢子（埼玉医大総合医療センター内科プログラム）
専攻医	PGY 4	山口 高史（栃木医療センター総合診療プログラム）

日本学会等認定資格		
日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医	4	鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医	5	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本専門医機構総合診療専門医	4	比嘉 研、渡邊 健太、書上 奏、周佐 峻佑
総合診療専門研修プログラム指導医	5	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本内科学会認定総合内科専門医	1	鈴木 諭
日本病院総合診療医学会認定病院総合診療医	2	鈴木 諭、中村 大輔
日本病院総合診療医学会認定指導医	1	鈴木 諭
日本救急医学会認定救急科専門医	1	小林 喜郎
臨床研修指導医	5	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本小児科学会小児科専門医	1	大塚 隆幸
日本小児神経学会小児神経専門医	1	大塚 隆幸
日本アレルギー学会専門医	1	大塚 隆幸
緩和ケアの基本教育に関する指導者研修会修了	1	鈴木 諭
日本医師会認定産業医	2	大塚 隆幸、比嘉 研
ICD 制度協議会認定 ICD	1	鈴木 諭
日本 DMAT 隊員	2	鈴木 諭（統括 DMAT）、小林 喜郎
医学博士	1	鈴木 諭

2022 年度総合診療科実績

【診療体制】

診療体制は、2021年度に研修教育担当を主に担って頂いていた副科長の比嘉研医師が高崎中央病院に出向することとなり、同任を宇敷萌医師が引き継ぐこととなりました。また、新たに着任した石渡彰医師が指導医（フェロー）として合流することで、診療体制及び教育体制を維持しました。日本専門医機構総合診療専門研修プログラムには新たに2名の専攻医を受け入れ、総勢専攻医6名（PGY 6が1名、PGY 5が2名、PGY 4が1名、PGY 1が2名）となりましたが、2021年度同様に総合診療 I、内科、小児科、救急科などの研修のため、数ヶ月単位で他科ないし他病院へ研修出向となる者もあり、当科に常時所属し診療従事する専攻医は2～3名となりました。また、上期には埼玉医科大学総合医療センター総合内科専門研修プログラムからPGY5の白井絢子医師を、下期には栃木医療センター総合診療専門研修プログラムからPGY4の山口高史医師が研修の一環で通常診療のシフトに入られました。

【概要】

2022年度は、新たに石渡彰医師、書上奏医師を総合診療科フェローとして迎え指導医・上級医の体制強化を行うと共に、初期研修医及び専攻医の教育やメンターの対応を強化する目的で、初めてチーフレジデントとして渡邊健太先生が着任しました。初期研修医や専攻医の教育環境整備を改めて行い、より良い総合診療・家庭医療研修を行える場を作り出す一歩の年度となりました。

専攻医としては、群馬家庭医療学センター総合診療専門研修プログラムー利根中央コースーの吉田卓生医師と植野貴也医師、利根中央病院総合内科専門研修プログラムの井上鍊太郎医師（当院での2年間のTransitional Year研修後、4月～9月在籍）を専攻医1年目として、4月～9月に埼玉医科大学総合医療センター総合診療内科・感染症科から白井絢子医師を専攻医3年目として、10月～3月にNHO栃木医療センター内科から山口高史医師を専攻医2年目として受け入れを行いました。特に外部プログラムから短期研修でいらした各専攻医の先生方においては、今までの経験を活かしつつ、日常診療を通

じて今までのセッティングとは異なる中山間地域の中規模総合病院で求められる病院総合診療（家庭医療）を学んで頂けたのではないかと考えています。

診療においては新たに2つのことにチャレンジを開始する年度となりました。いずれのチャレンジも、その目的は「中山間地域における、切れ目ない急性期から慢性期・在宅までの医療を提供すること」にあります。1つ目は総合診療科スタッフのうち家庭医療専門医資格を保有している医師を中心に、関連施設である利根中央診療所からの定期訪問診療を開始しました。今まで在宅療養を希望していても、医療側の体制不備から施設もしくは療養型病院転院等の方針となっていた方々が多数いましたが、2022年度4月以降は本人もしくは家族が在宅療養を希望された場合には、積極的に訪問診療導入を行いました。2つ目は総合診療科メンバーに新たな職種として4月から安部優子診療看護師、6月から南川美由紀診療看護師がメンバーに加わりました。病棟診療においては、殊に定期予約外来や訪問診療などにより指導医・上級医が不在となり専攻医や初期研修医が診療の中心となる場合があり、医療安全の側面からも診療体制の強化が必要となっていました。診療看護師が病棟チーム診療に加わることで、よりの確な診療と情報共有及び多職種連携が生まれたと思います。また、急性期病棟診療における疾患管理を中心に対応していた医師側の視点に診療看護師の視点を加えることで、地域・在宅に療養の場を移すにあたり必要な準備や対応を、より円滑に行い患者家族の利益につなげることができたのではないかと考えています。

2022年度は診療や教育においては環境整備を進めることができましたが、学会発表といった学術面での活動は少ない状況でした。日常の活動を学術的に発信することは、2023年度へ向けた持ち越しの課題として考えております。

【外来部門】

総合診療科では主に予約外来（スタッフ医師のみ）と予約外・初診外来、発熱外来、二次検診・ワクチン外来（月曜日午前及び土曜日午前）を担当しています。2021年度に引き続き診療体制の整備として、

従来の初診外来から分離独立した形で発熱外来を継続設置し、総合診療科が全日診察担当を行いました。また、利根沼田保健福祉事務所の依頼に基づきながら、医療圏内におけるCOVID-19のクラスター発生の可能性がある医療機関や介護福祉施設の対策を現地に赴き対応しました。

予約外来（常勤スタッフ予約外来）

12959名／年（96.6% 対2021年度）

二次検診・ワクチン外来

1131名／年（106% 対2021年度）

予約外・初診外来（平日通常診療時間帯受診）

3885名／年（75.7% 対2021年度）

発熱外来 11657名／年（215.3% 対2021年度）

予約外来は主に医長以上のスタッフ医師7名で週10単位（1単位＝午前ないし午後半日）を開設しています。高血圧、脂質異常症、糖尿病等の一般的な慢性疾患管理に始まり、高齢者の多疾病罹患（multimorbidity）を背景とした多科併診患者の外来通院科調整や、多剤内服調整も行なっています。また、医学的問題だけではなく精神的社会的背景への対応なども行っています。昨年度に引き続き、専攻医による退院後follow up外来の開設も行いました。

予約外・初診外来の総受診者数は、COVID-19のパンデミックに伴う疾患動向の変化や地域の方々自らの受診抑制等から、やや減少傾向ではありましたが、個々の症例の重症度は高い傾向となっており、1患者あたりの診療に要する時間が延長する傾向となりました。徒歩受診でも緊急性を有する疾患の方や重症者がいることから、外来混雑時や救急車重複要請時の対応を円滑にするために、2021年度に引き続き平日午前中においては診療ヘルプ医師を配置しました。また、発熱患者やCOVID-19流行地域からの来訪者、COVID-19の可能性が否定できない方については、看護師による電話問診及びトリアージの後、PPE（Personal Protective Equipment）装着の上、発熱外来での診療を行いました。発熱外来の年間受診患者数は11657名と非常に多く、地域における発熱患者の1次～2.5次診療を行っていた結果と考えています。

更に今年度も、前年度に引き続き専攻医や初期研

修医、医学生に対する教育を積極的に行ないました。2次医療圏内で唯一の総合病院機能を有する病院で、かつ群馬大学医学部の関連病院として、多くの専門外来を有する病院であるため、希少疾患や難病患者の状態悪化への対応も求められており、より幅広い疾患に対する知識と状態悪化時の適切な対応ができる医師を育てることを目標としています。そして学問としての医学的知識だけではなく、自身が対応する患者一人一人の心理・社会的背景を理解し配慮した医療（BPSモデル:Bio-Psycho-Social model）が提供できるように教育を続けました。

訪問診療に関しては、2022年4月に利根中央診療所の診療所長交代が行われたことをきっかけに、訪問診療体制の抜本的見直しを行いました。総合診療科所属の家庭医療専門医を中心に3名の医師が週3単位、関連医療機関である利根中央診療所から定期訪問診療を行いました。2021年度に引き続き、渡邊医師を中心に訪問診療プロジェクトを推進しております。

【救急部門】

2022年度も2021年度に引き続き、平日日勤時間帯及び毎週土曜日午前における、救急搬送及び徒歩来院後院内トリアージで救急対応が必要と判断された内科系救急患者対応を、総合診療科医師中心にシフト制で行いました。一部診療援助として総合内科専門研修プログラムの専攻医にも対応を依頼しました。2021年度の救急外来受診者の総数はCOVID-19 pandemicの状況下ではありましたが社会生活も一定行われるようになり、2020年度に引き続き増加傾向となり、救急搬入件数及び救急応需率も2021年度に引き続き高率を維持しています。

救急外来受診者総数

8848名／年（114% 対2020年度）

夜間休日患者数

7139名／年（137% 対2020年度）

救急搬入件数

2730名／年（114% 対2020年度）

内救急車2720名／年、ヘリコプター 10名／年

CPA 75名（ROSC 15名、

ROSC率 20%）

救急応需不能件数 52件（不応需率 1.9%）

発熱患者の救急搬送においてはCOVID-19 pandemicによる影響もあり、全例PPE着用で発熱診療ブースでの対応を行いました。年度通じて多くの発熱患者の救急受け入れを行うとともに、COVID-19専門病棟を稼働し、COVID-19患者及び疑似症においては当院救急外来で診療及び治療を行った後に円滑に該当病棟に入院を行うこととし、救急及び発熱外来から入院まで継続的な診療を行いました。

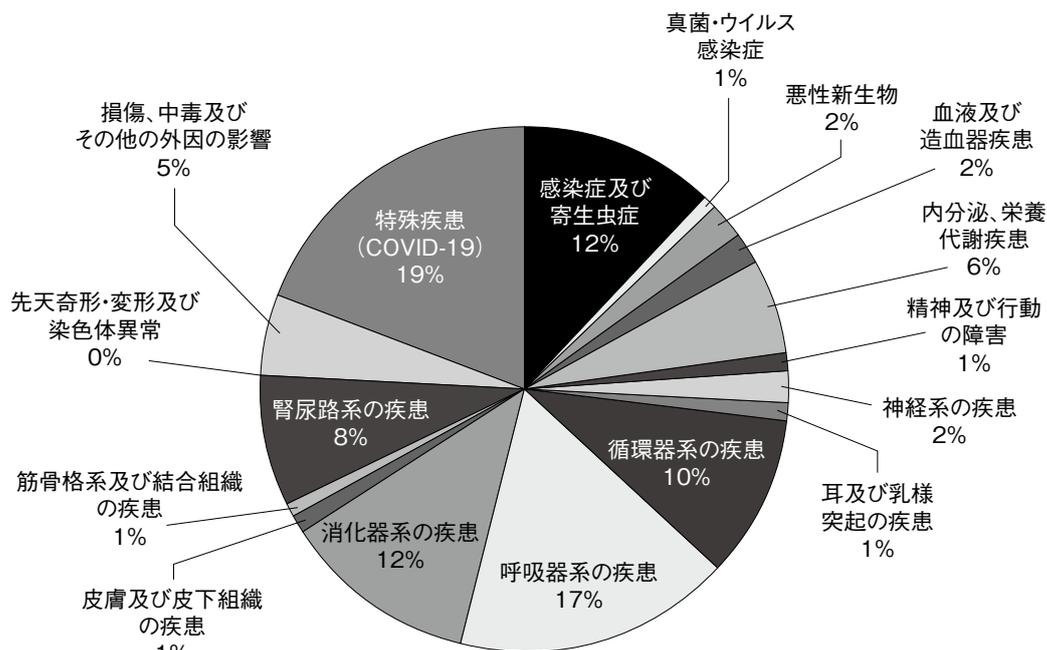
高齢化が進む利根沼田地域において高齢者救急の増加、CPA症例の増加は顕著となっています。利根沼田医療圏は東京23区と同等の医療圏面積であり、救急車両による搬送時間が長くなる傾向があり、重症救急対応やCPAのROSC率向上には病院前救急医療体制の整備と連携が必要です。利根沼田医療圏内で発生した3次救急医療機関対応が必要と判断された症例に関しては、前橋赤十字病院を基地病院とした群馬ドクターヘリに多大なる協力を得ています。ここ数年、利根沼田医療圏においてはJターン（基地病院に戻らず近隣医療機関に患者搬送を行う）割合が増加傾向にあります。

【入院部門】

2022年度も2021年度同様に専門的治療が必要な症例は臓器別専門科が主治医として受け持ち、多疾病罹患や疾病以外の社会的背景等が複雑かつ対応困難な症例については当科が入院主治医を受け持つ形を基本的にはとっています。より専門性の高い領域を臓器別専門科が主治医として入院対応するため、各臓器別専門科の周辺領域疾患に関しては該当科の状況に応じて当科が主治医として対応し、専門科からのアドバイスを受けながら入院診療を行いました。常勤医師が不在の疾患群に関しても外来各科専門医と連携した診療を行っており、結果として2022年度の当科担当入院患者の疾患内訳（ICD-10準拠）は多岐に及んでいます。

入院患者については2021年度同様、上級医＋専攻医＋初期研修医 3名1チームの構成で10名前後の受け持ち患者を担当しています。新たに合流した診療看護師の方々には、各チームメンバーの一人として、主治医や専攻医不在時の早期医療対応を行っていただきました。外来、救急、入院患者診療と多重業務となる医師の業務軽減に、診療看護師の方々が病棟診療チームの一員として関わることで、医療安全にも寄与したと考えています。

入院患者数の疾患別比率



総合診療科が担う業務は入院患者診療に留まらず、外来、救急、在宅診療に及ぶため、COVID-19流行状況等を考慮し受け持ち患者の制限を状況に応じて行いました。年度通じた総担当患者数は2021年度と比較し減少しましたが、地域の高齢化が進んでいる事等の影響から疾患複雑化が進み重症患者を担当する割合が増加傾向となっています。
入院患者数：1007名／年（84％ 対2021年度）

入院患者詳細：

サルモネラ胃腸炎、偽膜性腸炎、G群連鎖球菌敗血症、敗血症性ショック、三叉神経領域带状疱疹、汎発性带状疱疹、つつが虫病、レジオネラ肺炎、伝染性単核球症、食道癌、胃癌、S状結腸癌、下部胆管癌、肝細胞癌、膵頭部癌、癌性胸膜炎、転移性骨腫瘍、骨髄異形成症候群、骨髄繊維症、巨赤芽球性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、鉄欠乏性貧血、発熱性好中球減少症、無痛性甲状腺炎、糖尿病性ケトアシドーシス、高血糖高浸透圧症候群、高アンモニア血症、薬剤性低血糖、低ナトリウム血症、高カリウム血症、低カリウム血症、急性アルコール中毒、アルコール性ケトアシドーシス、ウェルニッケ脳症、悪性症候群、過換気症候群、進行性核上性麻痺、パーキンソン病、眼筋型重症筋無力症、癲癇複雑部分発作、症候性癲癇、一過性脳虚血発作、脊髄梗塞、睡眠時無呼吸症候群、顔面神経麻痺、神経調節性失神、メニエール病、良性発作性頭位めまい症、前庭神経炎、高血圧緊急症、急性心筋梗塞、肺動脈血栓塞栓症、急性心膜炎、感染性心内膜炎、大動脈弁狭窄症、蘇生後脳症、心肺停止、心室頻拍、小脳出血、視床出血、心原性脳塞栓症、アテローム性血栓性脳梗塞、下肢閉塞性動脈硬化症、胸部大動脈瘤、腹部大動脈瘤、上腸間膜動脈解離、下肢深部静脈血栓症、腸管膜リンパ節炎、急性喉頭蓋炎、急性咽頭炎、扁桃周囲膿瘍、細菌性肺炎、誤嚥性肺炎、気管支喘息発作、膿胸、胸膜炎、急性呼吸促迫症候群、人工呼吸器関連肺炎、特発性間質性肺炎急性増悪、自然気胸、縦隔気腫、マロリ・ワイス症候群、急性出血性胃潰瘍、出血性十二指腸潰瘍、腸管気腫症、虚血性大腸炎、腸腰筋膿瘍、便秘症、大腸憩室炎、急性アルコール性肝炎、アルコール性肝硬変、肝膿瘍、胆石性急性胆嚢炎、アルコール性急性膵炎、総胆管結石、蜂巣炎、頸部リンパ節炎、褥瘡、褥瘡感染症、化膿性関節炎、

偽痛風、頸椎偽痛風、多形浸出性紅斑、薬剤過敏性症候群、関節リウマチ、巨細胞動脈炎、顕微鏡的多発血管炎、リウマチ性多発筋痛症、化膿性椎間板炎、横紋筋融解症、腎盂腎炎、腎前性腎不全、慢性腎不全、尿管結石症、精巣上体炎、出血性膀胱炎、尿路感染症、急性前立腺炎、子宮留膿腫、頭部打撲、胸椎圧迫骨折、大腿骨頸部骨折、一酸化炭素中毒、ベンゾジアゼピン中毒、アセトアミノフェン中毒、抗うつ薬中毒、低体温症、蜂刺症、熱中症、アナフィラキシーショック、COVID-19

【教育】

病院総合診療/家庭医療学の面白さを学生や初期研修医へ実臨床を通じて伝えることを利根中央病院総合診療科の一つの役割と考えています。2022年度も引き続き初期研修医や専攻医の研修受け入れを行うとともに群馬大学医学部5～6年生の学外選択実習や見学学生の受け入れを積極的に行いました。COVID-19 pandemicによる影響で学外選択実習が一時中断されましたが、2021年と同様に実践的な教育を提供する様に心がけました。診療時間内に学生、研修医向けのカンファレンスやレクチャーを行い、on / off the jobのバランスを取っています。

学生実習受入：43名

(内群馬大学学外選択実習 18名)

初期研修受入：12名

morning lecture

利根中央病院では初期研修医や実習で来訪している医学生を主な対象としたmorning lectureを毎週火曜日ないし水曜日に定期的に行っています。専門各科の医師からのレクチャーもありますが、臨床研修を始めたばかりの初期研修医が日常で知っていた方が良い、臓器横断的な知識や社会資源等に関する知識を中心に、総合診療科スタッフ及び専攻医が依頼された内容に対してレクチャーを行いました。

<morning lecture担当テーマ一覧>

- ・「抗菌薬の適正使用」 石渡 彰
- ・「血液ガスの見方」 渡邊 健太
- ・「市中感染症の基本」 岩出 良介
- ・「予防接種レクチャー」 中村 大輔
- ・「インフルエンザの基本」 吉田 卓生

- ・「主治医意見書の書き方」 宇敷 萌
- ・「漢方薬への誘い」 比嘉 研
- ・「医療文書」 比嘉 研

SDH / SDGs教育

2021年度から初期研修医と群馬大学学外選択実習で来院する学生を主な対象とした「SDH / SDGsを学び理解するためのカリキュラム」を策定し運用を開始しています。2022年度も引き続き初期研修医と群馬大学学外選択実習で来院する学生を対象にSDH / SDGs教育を行いました。

本カリキュラムは、1. 生活環境や労働を背景とした疾患との関係性を理解すること、2. 地域特性に起因する医療システムの課題を理解し解決策を考えること、3. 住民が健康かつ豊かに生活できる持続可能な社会のあり方を考えること、の3点を主要な目的とし、最終的に患者の心理社会的背景を理解した診療を行うことの意義を学び日常診療において実践できることを目標としています。院内における理論学習を総合診療科スタッフ及び専攻医が担当したのちに医療圏内の各地域に出向き1週間の宿泊型生活体験研修を行っています。

<理論学習テーマ一覧>

- ・「BPS (Bio-Psycho-Social) モデル」
渡邊 健太
- ・「SDH / SDGs」
宇敷 萌

<宿泊型生活体験研修先>

- ・川場村富士山集落、一般社団法人WASAWASA 関連施設
- ・かたしな高原スキー場関連施設

外部講師招聘型教育

院内のスタッフだけではなく、外部講師を招聘した形で、主には医学生及び若手医師教育目的の総合診療／家庭医療領域に関するレクチャーや学習企画を、2021年度も主催ないし共催しました。COVID-19 pandemicの影響から、2022年度も引き続き現地集合型企画ではなくオンラインを利用した学習企画として開催をしています。

<院内レクチャー>

- 1) 感染症カンファレンス
埼玉医科大学総合医療センター 三村 一行医師
- 2) 胸部画像カンファレンス
立川総合病院 氏田万寿夫医師
- 3) 救急レクチャー
順天堂大学医学部附属順天堂医院 阿部 智一医師 計12回
- 4) 集中治療レクチャー
国保旭中央病院 坂本 壮医師 計4回

<学習企画>

- 1) 総合診療スキルアップセミナー 2022年6月18日
ケースで学ぶハートとスキル
「恋するER」
一宮西病院総合救急部 安藤 裕貴医師
「病状説明 ケースで学ぶハートとスキル」
南奈良総合医療センター総合診療科 天野 雅之医師
- 2) Web闘魂祭 2021年11月19日
「ケースで学ぶ身体診察×診断エラー」
群星沖繩臨床研修センター 徳田 安春医師
浦添総合病院病院総合内科 石井 大太医師
湘南鎌倉総合病院総合診療科 瀬戸 雅美医師

初期研修医教育：担当 飯島 研史（北毛病院）、
比嘉 研、宇敷 萌

初期研修医の集合研修として北毛病院から飯島研史医師に来訪頂き、月に1回の「レジデント・デイ」（学習企画とふりかえり）を継続開催しました。業務保証を行い時間内にレジデント・デイを定期的に行うことで、初期研修医自身が各々の研修内容を自身の成長に落とし込めるような形をとっています。レジデント・デイの学習テーマは、指導医と初期研修医の希望を調整しながら、初期研修プログラムとして初期研修医に学んでもらいたい内容を含めて決定し、指導医がファシリテートをする形で行っています。

<初期レジデント・デイ学習テーマ一覧>

- ・第1回：2022年4月「プレゼンテーション」

- ・第2回：2022年5月 「ショートプレゼン」
- ・第3回：2022年6月
「研修医のためのキャリア・アプローチ序」
- ・第4回：2022年7月
「研修医のためのストレスマネジメント」
- ・第5回：2022年8月
「医師のプロフェッショナリズムを考える」
- ・第6回：2022年9月 「Modified Mini-CEX」
- ・第7回：2022年10月
「研修医でも大丈夫！後輩指導のコツ」
- ・第8回：2022年11月 「医療統計」
- ・第9回：2022年12月
「医療者のためのコミュニケーション」
- ・第10回：2023年1月 「ACP」
- ・第11回：2023年2月 「Modified Mini-CEX」
- ・第12回：2023年3月
「Narrative-based medicine (NBM) ～
患者の病の語りに耳を傾けよう～」

専攻医教育：担当 群馬家庭医療学センター指導医
一同

群馬家庭医療学センター（G-CHAN）の総合診療専門研修プログラムとして、2021年度に引き続き、初期研修医と同様にG-CHAN所属の専攻医を対象とした月に1回の集合教育「G-CHANレジデント・デイ」を継続して開催しました。2022年度は2021年度に引き続きG-CHAN所属の専攻医数が増加していることもあり、レジデント・デイについては各々の「ふりかえり」を小グループに分かれて行う時間を優先的に確保し、基本的に学習企画は外部講師を招聘し行って頂く形を取りました。

<G-CHANレジデント・デイ学習テーマ一覧>

- ・4月 「オリエンテーション」
群馬家庭医療学センター 飯島 研史
- ・5月 「ケア移行とPF作成のコツ」
おく内科・在宅クリニック 奥 知久医師
- ・10月 「家族志向のケア」
福島県立医科大学 菅家 智史医師
- ・1月 「小児発達」
堀越内科クリニック 堀越 健医師

<企画>

- ・栃木・群馬合同 北関東ポータルフォリオ合宿
「SDHと社会的脆弱性・追いやられた人のアドボカシー」
札幌医科大学 佐藤 健太医師
- ・サイトピジットミニレクチャー
「診断推論」
栃木医療センター 矢吹 拓医師
- ・第10回群馬家庭医療セミナー
「家庭医の矜持」
多摩ファミリークリニック 大橋 博樹医師

【その他活動等】

学会活動：

- ・内科学会専門医部会診断プロセスワーキンググループメンバー 鈴木 諭
- ・病院総合診療医学会良質な診断ワーキンググループメンバー 鈴木 諭

学会演題発表等（演者）：

- ・日本内科学会第680回関東地方会（2022.9）
「化膿性脊椎炎を合併したStreptobacillus moniliformis (S.moniliformis) 菌血症の1例」
白井 絢子
- ・日本内科学会第683回関東地方会（2022.12）
「筋痛、関節痛を主訴に受診し、全身性エリテマトーデス(SLE)にリウマチ性多発筋痛症(PMR)、巨細胞性動脈炎(GCA)を合併した1例」
岩出 良介
- ・第13回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
2022年6月10～12日
一般演題 ポスター CR-7
「臨床倫理の4分割法を用いた多職種カンファレンスを通じて患者の意向に沿った提案が実現できた1例」
岩出 良介
- ・第13回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
2022年6月10～12日
一般演題 ポスター AR-93
「中山間地域での地域体験研修を通じたSDH／

SGDsを学び理解するためのカリキュラムの実践」

高橋 朋宏

・第54回日本医学教育学会大会 2022年8月5日～6日

一般演題 ポスター 02. 学習

「YouTubeとSlackを活用したビデオレビューの実践」

書上 奏

講演・学校保健活動等：

＜講演＞

・群商連共済会

健康講話 「身心一如のすゝめ」 比嘉 研

＜学校保健活動＞

・沼田市立沼田北小学校：小学校5年生対象「ケガの手当てと熱中症」 吉田 卓生

・利根実業高等学校：高校1年生対象「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

・沼田市立沼田西中学校：中学校3年生対象「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

・沼田女子高等学校：高校3年生対象「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

・川場村立川場中学校：中学校3年生対象「がん教育」 岩出 良介

・川場村立川場中学校：中学校3年生対象「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

・沼田市立沼田中学校：中学校3年生対象「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

・沼田市立沼田西中学校：中学2年生対象「心肺蘇生法（PUSH）」 鈴木 諭

・沼田小学校：小学校4～6年生対象「メディア教育」 鈴木 諭

・沼田高等学校：全学年対象「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

・みなかみ町立新治小学校：全学年対象「メディア教育」 鈴木 諭

・沼田市立沼田北小学校：小学校6年生対象「薬物乱用防止教室」 鈴木 諭

・沼田市立池田小学校：小学校5～6年生対象「いのちの大切さ」 鈴木 諭

・沼田市立利南東小学校：小学校5年生対象「薬物乱用防止教室」 鈴木 諭

・昭和村立昭和中学校：全学年対象「睡眠の大切さ・メディアとの向き合い方」 鈴木 諭

・沼田女子高等学校：高校1年生対象「心肺蘇生法（PUSH）」 鈴木 諭

・片品村立片品中学校：学校保健委員会委員対象「睡眠の大切さ」 鈴木 諭

執筆活動：

学術論文

1. 磯貝康太, 鈴木諭, 小林喜郎 他 (2023.3) . 利根中央病院における転院搬送症例の検討. 群馬県救急医療懇談会誌 17巻 (93-95) .

2. Ishimaru N, Suzuki S, Shimokawa T, Iijima K, Kanzawa Y, Nakajima T, Kinami S. Kikyo-to for Acute Upper Respiratory Tract Infection-Associated Sore Throat Pain: A Multicenter Randomized Controlled Trial. J Integr Complement Med. 2022 Sep;28 (9) :768-774. doi: 10.1089/jicm.2021.0433. Epub 2022 May 31. PMID: 35648044.

小児科

主な体制

医師体制

科長（部長）	：	西村 秀子
医員	：	江田 陽一
医員	：	八木 龍介

日本学会等認定資格

日本小児科学会認定小児専門医	1	八木 龍介
臨床研修指導医	1	西村 秀子

活動報告

■2022年度のまとめ

- ・外来診療 患者数は平均55.6人/日。

一般外来：小児の新型コロナウイルス感染者数が増加し、特に7～12月は陽性者が増加、20人/日を超える日もあった。発熱外来が大変混雑したため、小児発熱外来用の診察室や駐車場の増設などを行い対応した。

専門外来：内分泌外来、神経外来、消化器外来、心外来、腎外来などの専門外来を開設。消化器外来では便塞栓解除目的の注腸を2人に施行。腎外来では腎尿路奇形の評価目的の膀胱造影検査を2人に施行。火曜日午後には乳児健診枠を設け、早産児や低出生体重児の発育・発達のフォローやパリピズマブの投与を行った。6ヶ月～5歳未満の新型コロナワクチンが開始となり、他科医師や他職種の協力のもとワクチン接種を行った。

負荷試験：2022年度は食物負荷試験を21人に施行（卵 14人、牛乳・乳製品 4人、クルミ 1人、ソバ 1人、小麦 1人）。内分泌負荷試験を9人に施行（LHRH負荷 5人、アルギニン負荷 2人、アルギニン・TRH負荷 1人、四者負荷 1人）。

- ・入院診療 一般小児科 195人、新生児 105人
一般小児科：入院患者数は前年度とほぼ同数であった。肺炎・気管支炎・喘息様気管支炎（49人）、喉

頭炎（6人）など呼吸器感染症が全体の約1/3を占めていた。特にRSウイルス感染症（23人）やヒトメタニューモウイルス感染症（12人）によるものが多かった。特に前年度に比べ、ヒトメタニューモウイルス感染症が増加した。気管支喘息発作（21人）、尿路感染症（4人）、川崎病（5人）はほぼ同数であったが、痙攣発作（15人）や胃腸炎（26人）による入院が増加した。新型コロナウイルス感染症の入院は18人であったが、ほとんどが乳児期早期の発熱や年長児のけいれん発作であった。コロナ陽性の母体から出生した児も3人受け入れた。三次医療機関への転院搬送を行った患者は6人だった（不明熱、けいれん発作、気管支喘息大発作、炎症性腸疾患など）。

新生児：新生児の入院数も前年度とほぼ同数であった。低出生体重児（21人、体重<2000gの低出生体重児が3人）呼吸障害（16人）、低血糖、黄疸、初期嘔吐が入院の9割を占めていた。呼吸管理を要した患者は12人（N-DPAP：呼吸気交換式経鼻持続要圧呼吸法11人）、三次医療機関への転院搬送を行った患者は5人（フォロー四徴症、横隔膜ヘルニア、筋緊張低下の精査など）だった。

■2023年度の目標・課題

- コロナ渦の感染対策の徹底で、通常流行する時期に感染症に罹患せず、小児の免疫低下が指摘されている。感染症法の位置づけが5類に移行し、感染症の増加が予想されているため、外来・入院ともに様々な感染症に対応できるようにしていきたい。
- 乳児血管腫に対する内服治療（入院）はこれまで当院では行っていなかったが、群馬県立小児医療センター形成外科と協力しながら当院でも実施できるよう準備をすすめている。

外科

主な体制

医師体制

院長	:	関原 正夫
診療部長・科長・救急科副科長	:	郡 隆之
副科長(部長)	:	小林 克巳
医長	:	熊倉 裕二
医長	:	鹿野 颯太
医員	:	細井 信宏

日本学会等認定資格		
日本外科学会専門医	4	関原 正夫・郡 隆之・小林 克巳・熊倉 裕二
日本外科学会認定医	2	郡 隆之・小林 克巳
日本外科学会指導医	2	郡 隆之・小林 克巳
日本消化器外科学会認定医	1	関原 正夫
日本呼吸器外科学会専門医	1	郡 隆之
日本がん治療認定機構がん治療認定医	3	関原 正夫・郡 隆之・小林 克巳
日本消化器外科学会専門医	2	小林 克巳・熊倉 裕二
日本登山医学会認定山岳医・国際山岳医	1	鹿野 颯太
日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医	1	小林 克巳
日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医・指導医	1	郡 隆之
日本臨床栄養代謝学会認定医・指導医	1	郡 隆之
日本臨床栄養代謝学会認定医	1	小林 克巳
PEG・在宅医療学会 専門胃ろう造設者・認定胃ろう教育者	1	郡 隆之
日本消化器外科学会 消化器がん外科治療認定医	2	小林 克巳・熊倉 裕二
日本腹部救急医学会認定医	1	小林 克巳
日本食道学会食道科認定医	1	熊倉 裕二
日本DMAT隊員	1	関原 正夫(統括DMAT)
臨床研修指導医	3	郡 隆之・小林 克巳・熊倉 裕二

活動報告

■2022年度のまとめ

2022年はCOVID-19の感染拡大に伴う救急医療崩壊のため、2次医療圏内外からの救急疾患の受け入れ要請が昼夜を問わず増加した。幸い、大学からの外科医師派遣が2021年から増員されていたため、ほぼ当院で緊急手術の対応が可能であったが、救急対応に忙殺された1年間だった。主な対応疾患は、悪性腫瘍(肺癌、乳癌、胃癌、大腸癌)の手術・抗がん剤治療・緩和医療、急性疾患、外傷であった。また、利根沼田地区の耳鼻科・皮膚科常勤医師不在に伴う入院患者の受け入れを引き続き行った。

手術症例数

(2022. 1. 1 ~ 12.31)

疾患名	症例数	悪性	疾患名	症例数	悪性
食道腫瘍	0	0	イレウス	19	0
胃十二指腸潰瘍	3	0	虫垂炎	37	0
胃腫瘍	23	21	痔核、痔瘻	0	0
胆石症・胆嚢炎	49	0	ヘルニア	80	0
胆道腫瘍	0	0	乳腺	15	11
肝	1	0	甲状腺	0	0
脾	1	0	肺・縦隔・胸腔	32	17
大腸腫瘍	53	49	小児外科	0	0
その他大・小腸疾患	19	0	その他	83	0
			計	415	98

■2023年度の目標・課題

全領域において鏡視下手術の質の向上。

小林克巳医師による周術期栄養療法の質の向上。

熊倉裕二医師による食道外科領域の拡充。院内のPICC挿入・CVポート造設体制の強化。

鹿野颯太医師による肛門疾患領域の拡充。

スタッフの日本内視鏡外科学会技術認定医取得を目指す。

2022年4月より浦部貴史医師が、がん研有明病院呼吸器外科に2年間の国内留学中。

脳神経外科

主な体制

医師体制

副院長（脳神経外科科長・部長）：河内 英行

日本学会等認定資格

日本脳神経外科学会専門医	1	河内 英行
--------------	---	-------

活動報告

■2022年度のまとめ

健診センターで行っている脳ドックを月曜日・水曜日と複数日に設定することが出来、件数増加に繋がった。

手術件数

疾患	2019年度 (22件)	2020年度 (12件)	2021年度 (19件)	2022年度 (10件)
頭部外傷	18	9	15	9
水頭症	2	2	2	1
脳血管障害	2	0	0	0
脳腫瘍	0	0	0	0
その他	0	1	2	0

■2023年度の目標・課題

一般診療、救急診療のみならず脳卒中予防などの啓発活動を行っていききたい。

整形外科

主な体制

医師体制

科 長 (部 長)	:	須藤 執道
副 科 長 (部 長)	:	細川 高史
医 長	:	中島 知貴
医 員	:	高橋 佑
医 員	:	都築 俊平

日本学会等認定資格		
日本専門医機構認定整形外科専門医	2	須藤 執道・細川 高史
日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医	1	須藤 執道
日本手外科学会認定専門医	1	細川 高史
臨床研修指導医	2	須藤 執道・細川 高史

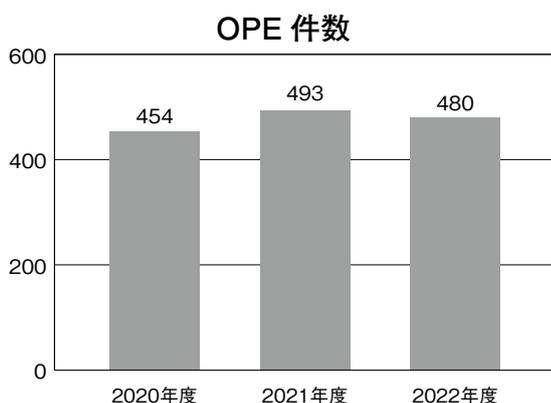
活動報告

■2022年度のまとめ

- 2022年度も骨折などの外傷を中心に幅広い対応を行った。
- 当院には手外科の専門医が在籍しており、上肢（手・肘・肩）の外傷や変性疾患に対する治療に力を入れている。近年では、血液透析導入に際してのシャント作成も行っている。

■2023年度の目標・課題

- 2023年度も引き続き、変形性関節症を代表とする変性疾患に対する治療と、高齢者の骨折の原因である骨粗鬆症に対する予防的治療を医師会の先生方と協調して行っていきたいと考えている。



産婦人科

主な体制

医師体制

名誉院長（産婦人科部長）	：	糸賀 俊一
科 長（医 長）	：	鈴木 陽介
医 長	：	西出 麻美
医 員	：	鹿野奈津美（8月より）

日本学会等認定資格			
日本産婦人科学会専門医	3	糸賀 俊一・鈴木 陽介・西出 麻美	
日本産婦人科学会指導医	1	糸賀 俊一	
臨床研修指導医	3	糸賀 俊一・鈴木 陽介・西出 麻美	

活動報告

■2022年度のまとめ

丸山医師の退任により2022年度は常勤医師3人体制でスタートし、8月より当院の初期研修医出身の鹿野奈津美医師が専攻医として加わった。地域の出生数が減少するなかで、県内外からの里帰り出産や外国籍の方の出産の割合が増加した。また、新型コロナウイルス感染症の流行が続く中、当院も陽性妊婦の対応施設となり、発熱外来・5C病棟、他の県内の陽性者対応施設と連携しながら、妊婦健診および分娩を継続した。婦人科分野では、地域で唯一の婦人科救急対応施設として、腹腔鏡手術や骨盤臓器脱に対する手術から悪性腫瘍に対する診断、治療、看取りまで幅広く対応した。引き続き初期臨床研修医の教育の他、医学生の実習も広く受け入れた。

■2023年度の目標・課題

2023年度より小松央憲医師が着任し、久しぶりの常勤医師5人体制となった。今後も医師体制の変更が予定されており、メンバーが入れ替わる中でいかに安全・安心な医療提供体制を継続していくかが課題である。

■2022年度診療実績

分娩数	407	腹式子宮全摘手術	20
吸引分娩	40	腹式付属器手術	16
鉗子分娩	4	悪性腫瘍手術	8
予定帝王切開	46	腹腔鏡下付属器手術	33
緊急帝王切開	25	腹腔鏡下子宮全摘手術	23
流産・中絶手術	24	子宮脱手術	21

麻酔科

主な体制

医師体制

常勤麻酔科医師 1 人

麻酔科部長・手術室室長 井手 政信

非常勤麻酔科医師（総数）6人

日本学会等認定資格		
日本麻酔科学会麻酔科標榜医	1	井手 政信
日本麻酔科学会麻酔科専門医	1	井手 政信
日本麻酔科学会麻酔科指導医	1	井手 政信
日本医師会認定産業医	1	井手 政信

活動報告

■2022年度まとめ

- 麻酔科では手術部・外来（術前診察・ペインクリニック）での診療を行っており、麻酔科管理症例は911件、麻酔法は全身麻酔が約7割で、その他は区域麻酔管理が主となっている。
- 患者の高齢化・緊急搬送対応など、合併症を有する重症患者割合は増加傾向
- 隔週1日（木）のペインクリニック外来では、带状疱疹後神経痛・筋骨格系疼痛管理が主体となっており、薬物療法や低侵襲ブロックで対応している。
- 手術患者の高齢化に伴い合併症を有する患者が増え、術前麻酔科診察・術後麻酔科診察等、周術期管理の必要・重要性がより増している。
- 非常勤麻酔科医師含めても常勤医師の負担は大きい。

■2023年度の目標・課題

- 非常勤麻酔科医師数6人と共に、周術期麻酔管理の安全確保を手術室スタッフと協力しより徹底したものとする。
- 外科各科/Co-medicalとの連携を深めて、周術期の安全かつ効率的運用を図る。
- 手術・麻酔の安全の確立のため、サインイン・タイムアウト等確認作業を周知/徹底する。
- 手術室看護師との患者情報共有と確認。
- 患者サービスにより寄与するべく、個々スタッフの心身健やかに務めることに留意する。

眼科

主な体制

医師体制

科 長（部 長）： 高橋 宙

日本学会等認定資格			
日本眼科学会 眼科専門医	1	高橋	宙
難病指定医	1	高橋	宙

活動報告

■2022年度まとめ

手術件数を以下に示す。

水晶体再建術	355眼
斜視手術	2眼
翼状片手術	5眼
眼瞼皮膚弛緩切除	2眼

■2023年度の目標・課題

昨年度は予定手術待機期間短縮のため手術枠を増やしおおむね3ヶ月以内を維持できている。白内障手術については保険診療で扱える2焦点眼内レンズを積極的に使用した。今年度より術前に眼内レンズ度数決定のためのアンケートを取り入れ、患者個別のニーズにさらに細かく対応していく。

リハビリテーション科

主な体制

医師体制

科 長（部 長）： 安藤 哲

日本学会等認定資格			
日本人間ドック学会認定医	1	安藤	哲
日本医師会認定産業医	1	安藤	哲
臨床研修指導医	1	安藤	哲

活動報告

■2022年度のまとめ

回復期リハビリテーション病棟では、年間延べ患者数は11,871人。運動器リハビリ：69.4%、脳血管リハビリ：23.3%、廃用症候群リハビリ：7.3%である。一時期、コロナ感染症による病棟閉鎖もあったが、短期間で乗り越えた。年間平均稼働率：98.6%、重症患者割合：47.14%、在宅復帰率：91.17%、紹介患者比率：6.13%であった。

■2023年度の目標・課題

他院からの受け入れが伸びていないため、地域連携を積み重ねていきたい。また、退院時16点以上の改善率を80%に伸ばしたい。

放射線科

主な体制

医師体制

科長（医長）： 山田 宏明

日本学会等認定資格

日本医学放射線学会放射線診断専門医	1	山田 宏明
日本医学放射線学会放射線科研修指導者	1	山田 宏明
臨床研修指導医	1	山田 宏明

活動報告

■2022年度のまとめ

当院の診療、治療が年々専門化、高度化してきており、それに伴って要求される放射線検査も複雑化してきている。コロナを含む救急患者も多かった。予約検査と救急検査の調整をしつつ滞りなく検査を行えるように努力をしたが、検査枠を十分に確保出来ないことや患者をお待たせすることもあり、今後の課題と考える。

2022年度もCT・MRIを中心に地域の先生方より多くの検査ご依頼を頂いた。稀ではあるが緊急対応が必要な疾患が読影時見つかることもあり、直ちに放射線科医師よりご依頼元の先生へご連絡させて頂いた。当院医師とも協力し、早期治療に結びつけられたと思う。

骨密度測定装置を更新した。以前の装置と比較して検査時間が短くなっており、患者の負担軽減が出来たと考えている。

多くの検査を行っているため、造影剤アレルギーも一定の頻度で生じている。基本的に放射線科医師が初期対応を行い、治療適応を判断している。2022年度も数件ではあるがアナフィラキシーショックがあった。いずれの患者も回復され大事には至っていない。アレルギーリスクが高い患者につ

いては、可能な限り放射線科医師が検査に立ち会い迅速な対応が出来るようにしている。

放射線科内にて独自のヒヤリハット報告を行い、毎月振り返りを行っている。アナフィラキシーショックなど緊急時対応のシミュレーションや各種勉強会を行い、検査の安全性や精度向上を図っている。

■2022年度診療実績

	総件数	前年比
一般撮影	32,783	96%
CT検査	10,037	92%
MRI検査	3,134	102%
健診関連	8,282	113%
総検査数	51,032	97%

放射線科診断部門読影件数

	件数	前年比
CT検査	8,250	125%
MRI検査	2,348	118%

■2022年の度目標・課題

放射線技師長が定年退職となり、新技師長となった。新入職技師2名を迎え、新体制にてスタートとなる。容易なことではないが、検査精度や安全性を担保しつつ新人教育にも力を入れていきたい。

検査の安全性や被ばく軽減を今まで以上に意識し、患者さんが安心して検査を受けられるように努力していく。

病理診断科

主な体制

医師体制

科 長（部 長）： 大野 順弘

日本学会等認定資格		
日本病理学会認定病理専門医	1	大野 順弘
日本臨床細胞学会細胞診指導医	1	大野 順弘
臨床研修指導医	1	大野 順弘

活動報告

■2022年度活動報告

【体制の整備】

日本病理学会登録施設

日本臨床細胞学会認定施設

【CPC】

6/20、12/19、3/20に開催

【診療実績】

組織検査	2,446
迅速検査	19
免疫染色	1,612
細胞診	3,488
迅速細胞診	24
病理解剖	5

■2022年度のまとめ

【精度管理】

- ・日臨技臨床検査制度管理では細胞診検査、病理組織検査ともにすべて評価Aだった。
- ・群馬県臨床検査精度管理調査は5問中1問不正解となり、正解率80%であった。

【業務改善】

- ・病理医の時短勤務により、医師業務をタスク・シフトし臨床検査技師による手術材料の切り出しを行い病理医の業務軽減につながった。
- ・CPCの病理医によるプレゼンテーションおよび報告書作成を群馬大学から派遣された医師に依頼した。

■2023年度の目標・課題

- ・病理医の業務軽減のため、タスク・シフトをさらに進められるよう準備を整える。
- ・病理医の時短勤務による外注化への検討。
- ・臨床医、がん診療委員会とともに、ゲノム医療に必要なコンパニオン診断のための検査に関わるマニュアルの作成を推進していく。
- ・病理医の後継者の養成。

健診センター

主な体制

医師体制

健診センター長	：	小沢 恵介
事務課長	：	中嶋 美保
保健師	：	4人
看護師	：	2人
准看護師	：	1人
事務員	：	8人

日本学会等認定資格		
人間ドックアドバイザー	2	山田 美香 ・ 樋口 雄大
検診マンモグラフィ読影認定医師	1	小沢 恵介
日本外科学会専門医	1	小沢 恵介
日本乳癌学会乳腺専門医	1	小沢 恵介
日本乳癌学会乳腺指導医	1	小沢 恵介
日本胸部外科学会胸部外科認定医	1	小沢 恵介
日本呼吸器外科学会呼吸器外科専門医	1	小沢 恵介

活動報告

■2022年度のまとめ

人間ドック数:2,528件（前年2,401件、105.3%）
 事業所検診数：3,462件、前年比101.6%
 協会健保健診：1,690件、前年比105.6%の受け入れを行った。

新型コロナウイルス感染症のワクチン接種や濃厚接触者による、健診・ドックの予約の変更などを柔軟に対応できるよう変更用の枠を増やし先延ばしにならないよう対応することができた。また、診断書検診も枠を増やし可能な限り受け入れを増やすことができた。

医師体制は昨年度同様で常勤医師1名と週3回の非常勤医師による協力で昨年より多くの件数を追求した。また、金曜日の隔週も非常勤医師の対応が可能となった。

各市町村からドック後の特定保健指導の依頼が増加し対応を始めた。

脳ドック希望も増加傾向であり、脳外科医師とも連携し対応ができた。

ストレスチェックは例年並みの対応を行った。

年度末には、人間ドック学会の機能評価の更新のための受審を関連職場と連携しながら行うことができた。

■2023年度の目標・課題

常勤の医師体制は今後も医師獲得に向けて努力を行う。保健師常勤増による特定保健指導への対応、各種資格取得への奨励・援助を行い、健診結果にもとづく指導対応について強化を行う。各健診期間の駆け込み需要を緩和するため期間中の早めの受診を機関紙等活用し呼びかける。

人間ドック学会の機能評価の更新が承認され、センター長が人間ドック学会の認定医にも認定されさらに、ドック・健診業務を充実させていく。

ドック・健診の件数増および保健指導を充実させ、地域住民の健康づくり・住みやすいまちづくり・安心して働ける職場づくりに貢献する。

皮膚科

主な体制

医師体制

医師（医長）：永井 弥生（非常勤）

活動報告

■2022年度のまとめ

【全体の動向】2022年度は前年度と同様に、平均週4回程度の非常勤医師による診療体制を保った。継続処置が必要な場合、緊急性のある場合や院内紹介などには適宜対応している。前年度同様、内科や外科の協力にて皮膚科疾患や褥瘡患者の入院にも対応できた。在宅や施設で発生した重度褥瘡に対する頻回のデブリドマンを要する方が続いた。血管障害に伴う潰瘍などが多いのも特徴であり、他科に協力しつつ局所処置に対応している。

【手術等】手術室における手術は週2-3件程度、局所麻酔による皮膚腫瘍切除の小手術に加え、皮膚癌や表皮内癌に対して局所麻酔下の皮弁形成術や植皮術も行っている。陥入爪に対しては、痛みの除去を目的として治療を選択している。テーピングや薬物治療のほか、装具による矯正治療、フェノール法、ワイヤー法など、症状に応じた治療の選択肢を提供している。

【褥瘡診療】在宅や施設等で発生した、繰り返しデブリドマンを必要とするような重症褥瘡が増加している。介護力などの社会的問題が背景にあり、早期対応が必要である。褥瘡ケアチームによるケアや現場での指導レベルが向上しており、問題となる場合に皮膚科医が診察を行う体制として、スムーズな診療が行えている。

【その他】皮膚科領域では近年、様々な疾患に対する新しい治療が進んでいる。難治性アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤、JAK阻害薬などの治療は良好な結果を得ている。難治性の慢性蕁麻疹に対しての皮下注射薬による治療、原発性腋多汗症に対する外用薬治療も適宜行っている。高齢者の肥厚が著しい足の爪白癬は、治療は難しいが、QOLの改善を図るために爪切除等の処置を行っている。

■2023年度の目標・課題

引き続き非常勤1名の体制にて週4日程度の診察日を保ち、緊急時には可能な限り対応していく予定である。他科と関連した疾患、社会的背景に伴って発生する病態などに対して、必要な皮膚科のスキルを提供し、他科・他職種との情報共有とともに、最前線で必要な皮膚科診療に関する教育、患者さんの適切な受診の啓発などに取り組んでいきたい。

泌尿器科

主な体制

医師体制

科長（医長）	：	金子 裕生
医師	：	野村 昌史（非常勤）
医師	：	大塚 保宏（非常勤）
医師	：	佐々木隆文（非常勤）

日本学会等認定資格		
日本泌尿器科学会専門医	4	金子 裕生、非常勤泌尿器科医師3人
日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会泌尿器ロボット支援手術プロクター	1	金子 裕生

活動報告

■2022年度のまとめ

泌尿器科は、2016年度から非常勤医師のみの体制であったが、2022年7月から、常勤医師を含む体制へ拡大した。それに伴い、外来は、週3回から週5回（月、火、水、木、金）へ増え、入院・手術も可能となった。入院・手術は、尿路感染症や血尿、前立腺生検や経尿道的手術全般などに対応している。開腹手術や鏡視下手術、ロボット支援手術が必要な場合には、他施設へ紹介している。

■2023年度の目標・課題

2023年度についても、同様の体制で診療を継続していく。新体制となった泌尿器科を利根沼田地区へ周知していき、診療の充実に貢献していく。

耳鼻咽喉科

主な体制

医師体制

医師（医長）	：	松山 敏之（非常勤）
医師	：	桑原 幹夫（非常勤）
医師	：	井田 翔太（非常勤）
医師	：	櫻井みずき（非常勤）
医師	：	内田 美帆（非常勤）

活動報告

■2022年度のまとめ

2022年度より外来診療日を拡大し、月曜日から土曜日の午前中に耳鼻咽喉科診療を行った。

2022年度の耳鼻咽喉科総外来数 6,119名（月平均509名）

2022年度の入院数19名（扁桃周囲膿瘍9名、急性扁桃炎1名、急性副鼻腔炎1名、めまい症2名、顔面神経麻痺1名、顎下腺炎1名、頭頸部癌2名）となっている。

月曜日から土曜日までの診察が可能になったことにより、入院数が増えた。常勤医が不在のため、入院管理の協力を外科や総合診療科の先生にお願いしている。

県北毛地区の耳鼻咽喉科頭頸部外科診療の拠点となる地域中核病院として診療している。耳鼻咽喉科一般診療に加え、中耳炎等の日帰り手術、めまいの精密検査、好酸球性副鼻腔炎に対する生物学的製剤治療、アレルギー性鼻炎に対するアレルギー免疫療法等を特徴として治療している。また県北毛地区の頭頸部癌患者さんの通院先、終末期緩和ケア治療先としての機能も担っている。

幅広く、質の高い医療を目指していくので、気軽にご紹介していただけたらと思っている。重度の入

院や手術による治療、さらなる精査が必要と判断された患者さんは、群馬大学医学部附属病院を始めとした病院に紹介させて頂くことがございますので、ご了承ください。

■2023年度の目標・課題

当院での精査加療には限度もあり、患者さんをはじめ、他科や連携協力医の諸先生にご迷惑をおかけしている。県北毛地区の耳鼻咽喉科頭頸部外科診療の向上が大きな課題となっている。

連携協力医の諸先生におかれましては、平素より大変お世話になっております。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

（群馬大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 松山敏之）

精神神経科

主な体制

医師体制

医師	:	渡會 昭夫（非常勤）
医師	:	藤平 和吉（非常勤）

活動報告

■2022年度のまとめ

2012年より精神神経科は非常勤医2名で週5日の体制となっている。医師不足により新患受け入れは原則休止となっている。地域の皆様、関係各機関の皆様には大変、不便、不自由をおかけしている状況である。なお、高齢者で地域外の医療機関への受診が困難な方、身体疾患のため他科と連携共同治療が必要な方などについては、新患受け入れを行ってきた。

■2023年度の目標・課題

昨年度と同じ診療体制となっている。新患受け入れ休止に伴い、徐々に患者管理数は減ってきたが、それも下げ止まった感がある。できる限り地域のニーズに答えたいとは考えているが、新患受け入れ休止は今年度も続けざるを得ない。昨年同様、高齢者で地域外の医療機関への受診が困難な方、身体疾患のため他科と連携共同治療が必要な方などについては、診療体制の許す限り対応したい。常勤医赴任に向けて努力をしていきたい。

看護部長室

主な体制

看護部長	:	布施 正子
副看護部長兼医療安全管理者	:	須田 良子
看護教育・学生対策担当師長	:	立木 歌織
感染管理認定看護師長	:	松井 奈美
看護師（育休中）	:	10人

日本学会等認定資格

認定看護管理者	2	布施 正子、立木 歌織
母性看護専門看護師	1	立木 歌織
感染管理認定看護師	1	松井 奈美
アドバンス助産師	1	立木 歌織
群馬県糖尿病療養指導士	1	須田 良子

活動報告

■2022年度のまとめ

2021年度に引き続き、看護単位を1単位増やし、COVID-19陽性患者を受け入れる病棟12床を運営した。一般病棟のベッド数が減少するなかでベッドコントロールを密に行い、全科で協力して入院患者の受け入れを行った。

また、コロナ禍で低迷した医療福祉生協活動への参加を看護部目標の一つとして掲げ、手洗い教室や保健講話、子ども食堂などにも積極的に参加することができた。

似顔絵セラピーの取り組みも軌道に乗り、4回／年開催や、5月には日本プライマリーケア学会の展示ブースに参加するなど当院の取り組みを内外に広めることができた。

COVID-19の流行の波を考慮しつつ、集合研修とウェブ研修をコントロールしながら人材育成に取り組んだ。16名の新人を受け入れ、COVID-19によるクラスター発生など職場の状況が落ちつかないなか、面談や部署異動など考慮しつつ対応した。

法人看護部では、看護師の特定行為研修終了者による「脱水時の輸液調整」が実施された。プロジェクトチームを継続して、今後の役割拡大についても論議を進める。

■2023年度の目標・課題

看護政策の更新に取り組んでいく。COVID-19対応と向き合った3年間を振り返り、その取り組みと地域に求められる看護師の役割について論議を重ねていく。また、少子高齢化が進捗するなかで、看護師の果たす役割を再考し、今後の人事配置や育成、看護部の管理体制のあり方など積極的に論議を進めていく。

外来 A (内科系外来)

主な体制

副看護部長兼看護師長	:	菅家まなみ
副主任	:	関上 美紀 加藤 政文
看護師	:	22人
准看護師	:	9人
精神保健福祉士	:	1人
看護補助者	:	7人

日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士	3	関上 美紀・堀内小百合・星 優子
群馬県糖尿病療養指導士	2	林 美知江・松井恵美子
日本循環器学会心不全療養指導士	1	小林 智子
インターベンションエキスパートナース	1	原澤 知恵

活動報告

■2022年度のまとめ

内科系は内科・総合診療科・精神科・光学医療室。発熱外来受診者数は10715名となった。またコロナ陽性者の診療も積極的におこない、さらに陽性者の入院受け入れもおこなってきた。この1年間も地域のコロナ感染症対応を積極的におこなってきた。

一般外来では訪問看護やMSWなどと連携を取りながら情報の共有、未受診患者へは電話かけをおこなうなど継続看護を実践してきた。昨年度取得した心不全療養指導士を中心に心不全の療養指導を開始。心不全早期発見プロジェクトを立ち上げ、地域の開業医からも積極的に受け入れをおこなってきた。

光学医療室では昨年度カテーテル検査（PCI含む）109件、大腸カメラ1524件。今年度より新たにESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）を14件おこなった。胃カメラ5516件、CF1523件、ERCP156件と内視鏡検査・治療ともに積極的に受け入れをおこなってきた。内視鏡治療も専門性が高くなったことから、

心臓カテーテル治療に特化したインターベンションエキスパートナースの資格を取得、安心して治療を受けていただけるよう看護師のスキルアップにも取り組んできた。

■2023年度の目標・課題

5月よりコロナウイルス感染症も5類へと変更になるが引き続き感染対策をおこないながら発熱患者の対応をおこなって行きたいと思う。さらに心不全患者、糖尿病患者への療養指導など看護外来にも積極的に取り組んでいきたい。

外来B（外科系・救急外来）

主 な 体 制

副看護部長兼看護師長	:	菅家まなみ
副 主 任	:	山本 典子
看 護 師	:	15人
准看護師	:	2人
視能訓練士	:	4人
看護補助者	:	3人

日本学会等認定資格

皮膚・排泄ケア認定看護師	1	松本 厚子
群馬県糖尿病療養指導士	1	飯田 模

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

外科系外来は救急外来・外科・脳外科・皮膚科・整形外科・泌尿器科・耳鼻科・眼科。

地域の開業医からの紹介患者も積極的に受け入れ、手術を含めた専門的治療をおこなってきた。

救急外来受診総数は8847名、夜間休日患者数7139名、救急搬入数2720名利根沼田圏内54.6%と昨年度よりも多くの救急車を含めた救急患者の受け入れをおこなってきた。救急不応需率も1.25%と「断らない救急」も実践、できる限り利根沼田医療圏で医療が完結できるよう努めてきた。

■2023年度の目標・課題

各外来では引き続き外科系患者の受け入れをおこなって行くのと同時に病棟・外来・在宅と連携をとりながら患者に継続的な看護を提供できるよう、システム作りに取り組んでいきたい。

救急科に関しては年々応需件数が増加していることから、看護師のスキルの向上と看護力の強化をしていきたいと思う。

3 A病棟・HCU

主な体制

看護師長	：	柴崎 芳光
主任	：	原澤 聖
副主任	：	竹内 吟江・茂木めぐみ
看護師	：	40人
准看護師	：	1人
看護補助者	：	3人

日本学会等認定資格

認知症認定看護師	1	石原千恵子
日本循環器学会心不全療養指導士	4	星野 卓央・羽鳥 陽子・小林 祐介・新居 沙織
3学会合同呼吸療法認定士	3	柴崎 芳光・原澤 聖・星野 佳祐
日本糖尿病療養指導士	1	高橋 秀徳

活動報告

■2022年度のまとめ

2022年度は新たに病棟内チーム活動としてせん妄対策や抑制ゼロに向けた活動を行った。認定看護師を中心に毎週カンファレンスや学習会を実施し職員の意識を高める事で一定の成果を得ることができた。

切れ目のない看護の提供をめざし在宅支援チームを立ち上げた。患者を生活者として捉え、入院時から患者の生活背景や家族支援など考慮しMSWと連携して支援を進めることができた。

継続して活動しているRCT（呼吸ケアチーム）では腹臥位療法の標準化を目指し必要物品や手順書の作成を進めており次年度完成させ実践していきたいと考えている。

心不全患者に対して療養指導や心臓リハビリテーションを行う体制は安定しており、今後も心不全の患者支援を続けて行きたい。

また、年度目標に掲げていた病棟内の心電図検定を作成し実施することができ、循環器病棟として知識を高める事に繋げることができた。

■2023年度の目標・課題

コロナ禍の影響もあり看護体制が厳しい時もありチーム活動が思うように進めることができない部分があったため2023年度はチーム活動（せん妄対策・抑制ゼロ、在宅支援、心臓リハビリ、RCT）を更に進めていくことを目指していく。

HCUでは更に急性期看護の知識技術を高めるため学習会を毎週開催していくとともに院外の研修や学会へ参加していきたい。

3 A病棟では患者を生活者として捉える視点を磨くためカンファレンスを充実させ、切れ目のない看護を提供できるような取り組みを進めていきたい。

4 A病棟

主 な 体 制

- 看護師長 : 生方真理子
- 主 任 : 増田 綾
- 副 主 任 : 星野 朋子
- 看 護 師 : 26人
- 准看護師 : 1人
- 看護助手 : 5人 (准看生徒を含む)

日本学会等認定資格

群馬県糖尿病療養指導士	1	増田 綾
-------------	---	------

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

- 2016年12月より周術期病棟（外科、整形外科、脳神経外科）として稼働している。
- 2022年7月より泌尿器科医師常勤化した。
- 2022年ベッド稼働率は平均95.9%。
- 手術件数（2022年度 入院手術のみ）

診療科	外科	整形外科	脳神経外科	泌尿器科
手術件数2022年度 (2021年度)	371(369)件	384(370)件	10(19)件	76件

- 大腿骨頸部骨折患者164名を受け入れた（2021年度144名）。認知症を合併している場合が多く、抑制患者が増加する要因となっている。
- 抑制に関しては、毎日昼休み後に、抑制カンファレンスの時間を設けたことで、スタッフ全員が抑制患者を把握することができ、さらに外すタイミングも話し合えるようになった。これからも、抑制患者の見極め、抑制に代わるアプローチの仕方、早期に抑制を外すタイミングを図っていきたい。
- 抑制カンファレンスの後にストマ・看護計画をカンファレンスで話し合い、難波事例の共有や看護計画の修正・終了を行い、継続看護を心がけることができた。
- ストマリハビリテーション講習会を2名受講した。

■2023年の課題

- 2023年は周術期看護の充実、定期的な勉強会の実施、看護カンファレンスの充実（抑制・ストマ・看護計画・デスクカンファレンス）を継続課題として考えている。
- 在宅支援の強化に向けた指導パンフレットの作成、在宅支援チェックリストの作成。
- 一部プライマリー制度の導入。患者を生活者として捉え、入院・外来・在宅と切れ目ない看護を行うための視点を養う。在宅分野と連携して、退院前訪問や退院後訪問も積極的に行っていく。

4 B病棟（地域包括ケア病棟）

主 な 体 制

看護師長	：	星野 晶子
主 任	：	渡辺 麻衣
副 主 任	：	笛木佳津江
看 護 師	：	21人
准看護師	：	1人
介護福祉士	：	3人
看護補助者	：	6人
社会福祉士	：	1人
リハビリスタッフ	：	3人

日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士	1	星野 晶子
------------	---	-------

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

地域包括ケア病棟では、疾患の再発予防・回復促進のために、リハビリ職員による機能リハビリ、看護師や介護福祉士による日常生活動作の再獲得のための生活リハビリなどを提供している。コロナ禍の影響で集合形式でのレクリエーションが出来ない状況になった。

今年度の診療報酬改定により、直入院の受け入れと転棟割合6割未満の算定要件が加わった。算定要件の数字を意識したベットコントロールが求められたが、各病棟と連携をとり算定要件はクリア出来ている。直入院の受け入れについて学習会を開催した。

看護カンファレンスを定期的に開催し、抑制解除について検討を行えている。看護カンファレンスを通じて患者が抱える問題点を明確化し、解決のための協議を他職種が連携して取り組めた。

■2023年度の目標・課題

直入院の受け入れや多様な疾患や病状の患者を受け入れているため、看護職員のスキルの向上求められ、学習会を定例化していく。

看護師業務が入退院関連にシフトしているため、介護福祉士のレクリエーションのスキルを活用し患者満足度を上げていきたい。

在宅退院に向けて患者指導をする機会が増えている。慢性疾患を抱えても療養しやすい指導を提供できるようにスキルアップに努めていく。

5 A病棟

主 な 体 制

看護師長	:	川端 由香
主 任	:	武井 香織
副 主 任	:	柴崎 恵・鹿野亜莉紗
看 護 師	:	28人
准看護師	:	3人
看護補助者	:	4人

日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士	2	川端 由香・星野 香織
日本心理学会認定心理士	1	中林 八千恵
認知症認定看護師	1	鹿野 亜莉紗

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

総合診療科・消化器内科・小児科・新生児治療室の混合病棟である。総合診療科では急性期から慢性期まで幅広い患者を多く受け入れてきた。また、社会的問題を抱えている患者も多く、退院に向けて社会保障・介護サービスなど様々な調整を行ってきた。退院調整が困難なケースは医師やソーシャルワーカーと相談し積極的に家屋訪問や退院前カンファレンスを行い退院へ繋げることができた。看護カンファレンスでは抑制解除に向け話し合いを行うことができた。

消化器内科では地域で唯一治療が行える医療機関であり、ERCPなど積極的に受入を行ってきた。2022年度は153件のERCPを行った。今年度は新たにESD治療が開始となり、6月から14件の受入を行った。肝生検は13件施行。癌患者の看取りも多く、急遽、在宅調整を行うケースもあり、ソーシャルワーカーやケアマネージャーなど地域と協力し行ってきた。

小児科外来では発熱者入口（受付）を設け、多くの発熱者・コロナ陽性者の対応を行い、7308件の

コロナ抗原検査を行った。またコロナ陽性者の出産に伴い3名の新生児を受け入れた。

■2023年度の課題

総合診療科・消化器内科ともに他院からの紹介も多いため、引き続き積極的な受入を行っていく。小児科は二次救急の受入や地域唯一の入院ベッドと地域で重要な役割を担っている。今後も他病棟と連携を図り、ベッドの有効利用を行いながらスムーズな入院対応を行っていく。

患者把握を十分に行い、入院から退院まで視野に入れた看護の提供と退院調整を行っていききたい。今後も患者・家族に寄り添った看護の提供や看護ケア、丁寧な対応を心がけていきたい。また、感染対策に留意し、ルールを守り、面会を継続していききたい。

5 B 病棟

主 な 体 制

看護師長	：	小野里千春
主 任	：	根津えり子
副 主 任	：	南雲 佳奈
看 護 師	：	25人
准看護師	：	1人
看護補助者	：	4人（准看生徒を含む）

日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士	2	青木 由香・生方 雅子
群馬県糖尿病療養指導士	1	林 圭子
摂食・嚥下障害認定看護師	1	根津えり子

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

呼吸器内科、腎臓内科、内分泌内科、手術対象外の外科、脳外科の混合病棟である。

外来化学療法室を兼務。9月より病棟6床で稼働していたコロナ病棟（5 C 病棟）を12床に拡大。5 B 病棟は30床の運用とした。5 C を除く病床稼働率は100.9%。外来化学療法室は月平均106.1件、病棟化学療法229件となった。糖尿病教室は22件開催し退院へ結びついている。2022年度は病棟内チーム（腎、COPD、DM、ケモ）活動を行い、学習会の開催やマニュアルの見直しを行った。患者周囲の環境整備に重点をあて患者荷物の整理や吸引後の汚染物を排除した。患者層は呼吸器の気胸、膿胸患者、腎臓内科は透析導入が増え、個室2床のため各病棟と連携をとり重症者、ターミナル患者の受け入れを行った。看護カンファレンスが定着し新人からの発言も増え成長を感じた。

■2023年度の課題

今後コロナ病棟の運用変化がみられる。それに伴い病床拡大に向け業務改善と、一般病床にてコロナ患者の受け入れとなるため、受け入れ準備を検討施行していく。

病棟内各チームのマニュアルの見直しが出来ずにいた。早期にマニュアル作成をしていく。

6 A病棟

主 な 体 制

看護師長	：	土澤 洋子
主 任	：	牧野真奈美・高橋 裕子
副 主 任	：	石井 友理
助 産 師	：	19人
看 護 師	：	1人
准看護師	：	3人
看護補助者	：	1人

日本学会等認定資格

アドバンス助産師	7	土澤 洋子・牧野真奈美・高橋 裕子・石井 友理・高橋 聡美 角田 明美・悴田 成美
----------	---	--

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

当院は群馬県の北毛地域で唯一の分娩取り扱い施設であり、利根沼田地域、吾妻地域を中心に近県在住者や里帰り出産も受け入れている。外国籍のかたの出産も多く、翻訳機を使用しながら、少しでも安心してご出産、育児を経験していただけるように日々努力をしている。

地域に根ざした医療をめざし小・中学校、高校などに産婦人科医師や助産師が協力して参加し「性」や「命」について将来を担う子どもたちに伝え、共に学ぶ機会があった。

基本的には産婦人科を担当しているが、眼科や整形外科などの女性の方の入院も受け入れている。

■2023年度の課題

新型コロナウイルスが5類になり、また新たな時代に突入したように感じる。ここ数年失われていた、母親学級やマタニティーヨガ、ベビーマッサージなどの集合教育を感染対策を講じながら、新たな形で提供できるかが課題である。

6 B病棟（回復期リハビリテーション病棟）

主 な 体 制

看護師長	：	倉澤 孝代
主 任	：	西巻 定子
副 主 任	：	萩原とよみ
看 護 師	：	15人
准看護師	：	3人
介護福祉士	：	4人
看護補助者	：	2人

活 動 報 告

■2021年度のまとめ

回復期リハビリテーション病棟入院料1に対し、在宅復帰率91.17%・入院時重症患者割合47.14%・重症者における退院時FIM16点以上改善率76.69%・入院患者1日平均32.54人・平均在院日数57.54日・年間稼働率98.6%・紹介患者13人であった。

診療報酬改定により、入院時重症患者割合が30%から40%に引き上げられた。毎月の割合が40%を超えることは難しかったが、平均で47.14%と基準を大きく上回る重症者の受け入れが行えた。高齢の独居患者が増える中、リハビリを充実させることで、できるだけ身体を元に近い状態まで戻し、家屋訪問や利用サービスを充実させ自宅退院へと繋げた。

コロナ感染症で8月と12月にクラスターが発生し、感染患者を抱えながらも病棟内で出来るリハビリを継続した。感染対策として、一人ずつの入浴や食堂の座席配置の工夫を行ない、感染を予防しつつも生活を変化させない取り組みができた。リハビリ面談や家屋訪問などは、感染状況に合わせ患者同行を実施した。

■2023年度の課題

- 退院に向けてのリハビリ面談では、患者・家族へ分かり易い説明を心がけていく。
- 全職員が、患者の全体像を捉えた退院支援が行える。受け持ち患者の家屋訪問にできるだけ同行していく。
- 認知症対策として、レクリエーションを充実させる。
- 抑制しない取り組みの実践。
- 学習会を充実させ、積極的に行動出来るようにする。

手術室・中央材料室

主な体制

看護師長	:	塩野 愛性
副主任	:	千明咲姫恵
看護師	:	12人
准看護師	:	1人
看護補助者	:	4人

日本学会等認定資格

第2種滅菌技師	1	宮前 雄一
周術期管理チーム認定制度	1	吉澤 好一
インターベーションエキスパートナース	1	吉澤 好一

活動報告

■2022年度のまとめ

<手術室>

2022年度の手術件数は1634件（前年比-48）、うち麻酔科症例は934件であった（前年比+119）。

科別手術件数は、外科439件（前年比+24）整形外科492件（前年比-11）産婦人科218件（前年比+17）眼科367件（前年比-108）脳外科10件（前年比-9）皮膚科65件（前年比-16）と手術件数は少なかったが麻酔症例が増加している。

当院は利根沼田地域で断らない救急を基に緊急手術にも対応している。2022年度は緊急手術も多く65件だった。また時間内の緊急手術は124件だった。

当院では安心して手術が受けられるよう外来・入院センター・病棟と連携し、パンフレットを用いて統一した説明を行い、手術室では術前・術後訪問を行い患者の不安を軽減できるよう心掛けている。

また、新型コロナにも対応するため、院内感染対策委員会と共同し、定期的な学習会や訓練を行った。

<中央材料室>

病院、利根保健生協の事業所全体の洗浄滅菌を請けおい、安全で安心できる医療機器の提供に努めて

いる。スタッフ個々もスキルアップのため群馬県中央材料研究会へ参加。医療現場における滅菌保証のガイドラインを参考に実施している。

1日あたりの洗浄機の運行回数

洗浄機2台 8.5回/日

1日あたりの滅菌器の運行回数

高圧蒸気滅菌器2台 4回/日

プラズマ滅菌機1台 2回/日

■2023年度の課題

<手術室>

手術室看護師の役割は周術期における患者の安全を守り、手術が円滑に遂行できるように専門的知識と技術を提供することにある。2023年の課題は、ラダーの活用、事例の振り返り、OJTの充実をはかる。また、心理的安全性が保たれた職場で医療安全の強化と、感染対策の統一認識、術前外来での手術室看護師の説明に取り組みたい。

<中央材料室>

滅菌技師の資格取得をめざし学習し、より安全で質の高い器材の提供を目指す。

透析室

主な体制

看護師長 : 阿部 冴子
主 任 : 関根美知子
看護師 : 10人
准看護師 : 2人

活動報告

■2022年度のまとめ

腎臓内科医師が2名体制となり、検査日を週2日と増やしたため2022年度はDSA42%増加、PTA18%増加した。またシャントカルテを作成しシャント異常の早期発見につなげることが出来、シャント閉塞は0件だった。

前年度はコロナ病床でCHDを用いて透析を行っていたが、12月からコロナ陽性患者を外来透析が行えるよう体制を整えた。そのため透析効率も上がり、入院しなくてもコロナの治療が行えるようになった。また他院のコロナ陽性患者を5名受け入れ、地域の透析医療に貢献した。そしてN95マスクの装着や、患者さんへの注意喚起を行うことで、クラスターの発生を抑えることができた。

また、足回診では気になる患者さんの情報共有し勉強会を開催。透析前に足浴や爪切りを行うことで、足病変の改善につなげることが出来た。

■2023年度の課題

筋力低下や廃用が進み、自宅から維持透析へ通う事が困難な患者が増加している。介護保険の早期介入や、家族への指導など積極的に行っていきたい。

また維持透析患者の定数確保を行い、常に満床運営を目指していく。

検査室

主な体制

技師長	：	関根美智子
主任	：	林 美奈
副主任	：	稲垣 圭子 深代やす子 宇敷 明人
検査技師	：	21人
看護師	：	3人
准看護師	：	1人

日本学会等認定資格		
細胞検査士	4	稲垣 圭子・深代やす子・森川 容子・真下 祐一
日臨技認定病理検査技師	2	深代やす子・森川 容子
超音波検査士	2	林 美奈・高木ゆかり
日本糖尿病療養指導士	2	宇敷 明人・齋藤 奏太
NST 専門療法士	2	関根美智子・荻野 亮子
日本 DMAT 隊員	1	荻野 亮子

活動報告

■2022年度のまとめ

新入職員が3人入職し、日常業務や当直業務を遂行出来るよう研修を行った。

昨年度に引き続き新型コロナウイルスの検査を多数実施した。夜間もPCR検査ができるように宅直体制を整え、群馬県衛生環境研究所へのサーベイランスにも協力することができた。また、新型コロナの検査について、学会や検査交流集会などで発表することができた。

資格認定について、齋藤が日本糖尿病療養指導士、荻野が日本DMAT隊員に合格した。

地域医療活動では、昨年と同様に沼田准看学校の講師に病理部門から真下を派遣した。

研修については、新入職員の育成を始め、採血室、輸血検査、細菌室などを中心に初期研修医への指導や、群馬パース大学4年生2人の臨床実習の受け入れを行い、育成に協力することができた。

■2022年度診療実績

項目	件数	前年度比(%)
尿・一般検査	205,898	108.7
血液検査	312,371	102.3
生化学検査	900,534	103.8
細菌検査	31,766	115.5
生理検査	18,343	101.9
病理検査	4,558	98.3
外部委託	37,615	104.9

■2023年度の課題

*アフターコロナに向けて…遺伝子検査装置や抗原定量検査機器での新たな検査項目導入に向けて検討を行う。

*チーム医療への参加…心不全早期発見プロジェクト、感染防止対策チーム（ICT）、抗菌薬適正使用支援チーム（AST）、糖尿病教室、心臓リハビリチームへの参加はもちろんの事、患者様に対しての結果説明の実施など、検査技師ならではの役割を果たす。

- * 研修医への指導…研修プログラムに沿って研修医への研修を充実させる。
- * 研究発表への取り組み…日常業務で取り組んできた内容をまとめ、研究発表につなげていく。
- * 経営改善に向けて…負荷心エコーへの協力や心肺負荷試験（CPX）の件数を増やし、経営改善に取り組む。

放射線室

主 な 体 制

読影医（放射線科科長）	：	山田 宏明
技師長	：	小野 和夫
主 任	：	本多 拓晶
副主任	：	中村 文彦
診療放射線技師	：	11人 (1日パートを含む)

日本学会等認定資格

日本医学放射線学会放射線診断専門医	1	山田 宏明
健診マンモグラフィー撮影技術認定	3	栗原 真実・笛木 梨絵・井上 美華
放射線管理士	2	本多 拓晶・笛木 梨絵
ICLS インストラクター	1	大竹 毅
放射線機器管理士	1	本多 拓晶
医療画像情報精度管理士	1	本多 拓晶
臨床実習指導員	1	笛木 梨絵

活 動 報 告

■2022年度診療実績

項 目	件 数	前年比
一般撮影	32,783	96%
CT検査	10,037	92%
MRI検査	3,134	102%
健診関連	8,282	113%
総検査数	51,032	97%

■2022年度のまとめ

放射線科医師の指示のもと、CTやMRIの撮影プロトコルを日々改訂した。

骨密度装置を更新し画像がよくなった。

マンモグラフィー担当は全て女性の技師で対応ができる。

マンモグラフィー、健診業務が増加している。

■2023年の課題

進化する放射線診断技術を学習してチーム医療に貢献する。

人材育成を中心課題とし、当直対応や業務をさらに発展させる。

栄養管理室

主な体制

室長	：	林 和代（管理栄養士）
副主任	：	中林 国祐（調理師）
管理栄養士	：	8人
栄養士	：	5人
調理師	：	7人
調理員	：	5人
事務員	：	1人

日本学会等認定資格

栄養サポートチーム専門療法士	2	林 和代・芹川 梢
日本糖尿病療養指導士	7	林 和代・芹川 梢・櫻井 万幾・杉木 裕子・石坂 薫・千吉良萌美・信澤 妙佳
人間ドック健診情報管理指導士	1	林 和代
栄養経営士	1	林 和代

活動報告

■2022年のまとめ

- 診療報酬改定により「早期栄養介入管理加算」の算定を6月より開始した。HCUでの朝回診に担当管理栄養士とNST専任管理栄養士が参加、栄養モニタリングシート作成、他職種と連携し、栄養管理を充実させた。介入患者はNSTに繋げ、NST件数が増加した。
- 日本糖尿病療養指導士1人合格、資格取得者7人となった。
- 地域医療活動では、子育て応援企画「子育てを楽にする魔法」・にっこり教室「食中毒、熱中症について」・JA親子教室「夏野菜の栄養素について」の講師を担当した。また2022年度から沼田准看学校の「栄養」の講師を担当している。
- 厨房内業務は、前年度から継続してコロナ病棟患者対応の食事、喫食状況に応じた個別対応を行った。新人栄養士2人は順調に業務を習得、自宅待機のため欠員状況となり、通常とは異なるタイム

スケジュールでも対応できた。

項目	件数	月平均	前年比
外来栄養指導	2,559	213	101%
入院栄養指導	1,486	124	84%
集団栄養指導	47	4	58%
糖尿病透析予防指導	256	21	85%
栄養サポートチーム加算	2,063	172	104%
早期栄養介入管理加算Ⅰ（経腸）	103	9	
早期栄養介入管理加算Ⅱ（経口）	1,960	163	

■2023年の課題

- 入院から外来に繋げ、療養指導の継続を目指す。
- 認定資格の取得に向けて取り組む。

【学会発表】

日本臨床栄養代謝学会 管理栄養士 芹川 梢
「NST専門療法士・認定教育施設の臨床実地修練新制度移行について」

リハビリテーション室

主 な 体 制

技 士 長	：	諸 田 顕 (理学療法士)
主 任	：	石 井 亮 (理学療法士)
		諸 田 千 尋 (理学療法士)
		浦 川 美 栄 (作業療法士)
		原 澤 陽 二 (言語聴覚士)
		志 賀 達 也 (理学療法士)
副 主 任	：	勝 見 佐 知 子 (歯科衛生士)
		坂 牧 愛 美 (作業療法士)
		宮 崎 真 梨 子 (理学療法士)
		岩 東 裕 之 (作業療法士)
		茂 木 崇 (理学療法士)
		木 下 直 人 (理学療法士)
		清 水 雅 仁 (作業療法士)
理学療法士	：	37人
作業療法士	：	12人
言語聴覚士	：	4人
歯科衛生士	：	1人

日本学会等認定資格

新潟大学博士課程修了	1	原澤 陽二 (言語聴覚士)
群馬大学修士課程修了	1	篠崎 典恵 (理学療法士)
茨木県立医療大学修士課程修了	1	茂木 崇 (理学療法士)
医科歯科連携・口腔機能管理 認定歯科衛生士	1	勝見佐知子 (歯科衛生士)
糖尿病予防指導 認定歯科衛生士	1	勝見佐知子 (歯科衛生士)
N S T 専門療法士	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士)
心臓リハビリテーション指導士	4	狩野進之助・増田 睦・志賀 達也・平井 優香 (理学療法士)
3学会合同呼吸療法認定士	6	諸田 顕・志賀 達也・津久井智子・篠崎 典恵・高山 翔平 (理学療法士)・井野 巧 (作業療法士)
認知症ケア専門士	2	増田 睦 (理学療法士)・浦川 美栄 (作業療法士)
群馬県糖尿病療養指導士	2	志賀 達也・七五三木史拓 (理学療法士)
がんリハビリテーション研修修了	20	理学療法士 10人・作業療法士 7人・言語聴覚士 3人
介護予防推進リーダー	11	理学療法士 11人
地域包括ケア推進リーダー	11	理学療法士 11人
臨床実習指導者講習会修了	30	理学療法士 21人・作業療法士 9人

活 動 報 告

■2022年のまとめ

新総合事業における地域への参加は49回延べ58人の職員を派遣した。地域包括ケアシステム構築に向けて自治体や他事業所との連携が進展している。

切れ目のないサービスを目標に一般病棟の日曜対応を継続した。

■2023年の課題

事業の質の強化及び一般病棟の切れ目のないサービスを目標にスタッフの確保が課題である。

地域での介護予防の推進・全病棟でのがんリハビリテーションの提供・心臓リハビリテーションの対応強化及びリスク軽減・呼吸器疾患の入院対応やCOPDの外来対応の強化・糖尿病患者の教育の推進・栄養と運動の視点での対応・認知症患者の対応の質の強化・ドライブシミュレーターの運用推進を図りたい。

また、サービスの質を向上させるため、学会等認定資格取得者も増やしたい。

職場人数が増加しており、教育体制の充実が必要である。

疾患別リハビリテーション科等	2021年度	2022年度	前年比
がんリハビリテーション科	2,642単位	2,416単位	91%
脳血管リハビリテーション科I	30,413単位	30,178単位	99%
廃用リハビリテーション科I	24,882単位	29,652単位	119%
運動器リハビリテーション科I	76,587単位	85,644単位	112%
呼吸器リハビリテーション科I	12,265単位	12,996単位	106%
心臓リハビリテーション科I	12,640単位	11,524単位	91%
摂食機能療法	5,298件	5,918件	112%

臨床工学室

主な体制

技士長 : 林 貴幸
主任 : 福田 浩嗣
臨床工学技士 : 7人

日本学会等認定資格

透析療法合同専門委員会 透析技術認定士	1	福田 浩嗣
日本心血管インターベンション治療学会 心血管インターベンション技師	2	福田 浩嗣・外川 拓実
ME 技術教育委員会 第2種 ME 技術実力検定	4	林 貴幸・福田 浩嗣・佐渡 拓斗・竹部 悠希

活動報告

■2022年のまとめ

- 医療安全向上のため、定期的な医療機器研修会の開催や各種委員会の参加に努め、活動を継続している。
- 新人看護師・初期研修医に医療機器・医療安全の研修会を開催している。
- 日々、医療機器安全ラウンド、日常点検及び、定期点検を行い安心安全な医療を提供出来る様に活動している。
- 各種委員会の参加や、学習会の取り組みを通じて、医療安全の向上を目指している。
- 接遇と医療安全向上の為、朝礼時に勤務者全員で標語の唱和を継続している。
- 超純水透析液基準を継続し、治療機器を更新し慢性維持透析濾過加算取得率を向上させた。
- シャントPTAの際に医師の負担軽減の為、助手として術野に入った。
- COVID-19感染透析患者に対して多用途血液処理装置を用いて対応した。
- COVID-19患者対応病棟スタッフ向けに定期的な呼吸療法の学習会を継続した。
- 業務拡張・タスクシフトに向けて手術室業務を一部担った。

■2022年度診療実績

	件数	前年度比
医療機器終了時点検及び、定期点検件数	4,491件	105%
血液透析件数	11,783件	96%
HCU血液浄化件数	77件	120%
HCU CRRT件数	9件	128%
腹水濃縮処理件数	9件	23%
血液吸着式血液浄化件数	22件	122%
心臓カテーテル検査及び治療総件数	273件	88%
ペースメーカー外来件数	163件	101%
遠隔モニタリング	427件	116%

■2023年度の課題

- 新人看護師・初期研修医の医療機器、医療安全研修内容を定期的に見直し、最新の情報を提供できるようにする。
- 呼吸ケアチームと共同し安全な運用を確立し、安全と質の向上に貢献する。
- 中途採用者に医療機器研修を企画し統一した手技を整えていく。
- 医療機器の日常点検・定期点検を行い、安心安全な医療提供が出来る様にする。
- 医師の働き方改革に基づき臨床工学技士に求められる業務拡張に対応するため各種研修に参加し知識・技術の習得に努める。
- 医療機器の計画的な新規導入・更新を立案し長期運用計画を作成し運営に貢献する。

薬剤部

主な体制

部長	：	大竹美恵子
主任	：	宮内 智行
薬剤師	：	13人（うち1人育児休暇） 助手2人

日本学会等認定資格

日本病院薬剤師会 妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師	1人
日本緩和医療薬学会 緩和薬物療法認定薬剤師	1人
日本糖尿病療法指導士	1人
JSPEN 栄養サポートチーム専門療法士	1人
日本アンチ・ドーピング機構 スポーツファーマシスト	1人
薬学教育協議会 認定実務実習指導薬剤師	3人
日本病院薬剤師会 日病薬病院薬学認定薬剤師	1人
日本薬剤師研修センター 研修認定薬剤師	5人

活動報告

■2022年のまとめ

項目	件数	前年度比
剤管理指導料1	2,843件	93.8%
薬剤管理指導料2	3,700件	80.8%
病棟薬剤業務実施加算1	10,343件	98.3%
病棟薬剤業務実施加算2	4,020件	97.8%
退院時指導	109件	66.1%
麻薬管理指導	169件	81.3%
無菌調製件数（抗がん剤）	2,654件	131.6%
無菌調製件数	238件	50.1%

新卒薬剤師2人が入職した。ラダーを取り入れ、2年かけて育成する研修内容に変更し、着実に力をつけている。しかしながら、2年目から病棟業務を研修することになっていること、および病棟担当薬剤師が7月末から産休・育休で業務から離脱し、その補充ができなかったという2つの理由から、業務件数は前年度を維持することができなかった。

薬学生実務実習は3人受け入れた。コロナの影響で制限付きの実習となってしまったが、病院薬剤師のやりがいを感じてもらえた。

■2023年の課題

2022年に続き、2023年も新卒薬剤師が2人入職する。2022年組が自身の経験を活かした導入時研修の指導を2023年組にすることで、きめ細かい研修内容となる見込みである。この指導体験により2022年組の意欲向上に繋がり、病棟業務が主になる2年目研修にも積極的に参加し成長することを期待する。そこから脆弱化した体制を立て直し、業務改善、質の向上に繋げていき、新しい業務である術後疼痛管理チームの準備を始めたい。

また、現在は薬剤師常駐が必須ではない回復期リハビリ病棟および地域包括ケア病棟にも薬剤師を配置し、在宅へ繋げる薬物治療にも関与していきたい。

病院事務局

主な体制

事務長 : 五十嵐きよみ
事務次長 : 高井 一茂
 : 井本 光洋
 : 水野 正敏

日本学会等認定資格		
診療情報管理士	1	高井 一茂
社会福祉士	1	水野 正敏
福祉住環境コーディネーター2級	1	水野 正敏
介護支援専門員	1	水野 正敏

活動報告

■2022年度まとめ

新型コロナウイルス感染症への対応として地域の感染拡大防止に取り組むため、各科・各職場の奮闘により「断らない救急」「断らない発熱」を合言葉に救急患者を多数受け入れた1年であった。オミクロン株の影響により院内でもクラスターが発生したが、感染対策を強化して短期間で終息するに至った。地域でも医療機関や高齢者施設でクラスターが発生し、CMAT派遣要請に応じた。感染拡大第8波では県内のコロナ患者受入病院のひっ迫により、当院でも受入病棟以外の病棟で陽性者や疑似症を受入れた。陽性者外来では小児も輪番に加わり、小児発熱専用入口を造設して対応した。コロナワクチンは接種体制を維持して切れ目なく実施し、小児ワクチン接種も対応した。

地域の周産期医療を守るために産婦人科医師確保を重点課題と位置付け、大学や行政等への働きかけ強化して新たな医師を確保することができた。他にも消化器内科・腎臓内科・総合診療科・外科で医師増員、泌尿器科では7年ぶりに常勤医師を迎え、診療体制が充実した。初期研修医のマッチングも6年

連続のフルマッチとなった。

働きやすい職場への取り組みとしてはワークライフバランス推進委員会が中心となり、全職員を対象としたハラスメント意識調査の実施、ハラスメント注意喚起ポスターの配布、「ありがとうございますのお届け便」などを実施した。また、似顔絵セラピープロジェクトを立ち上げ、外部講師の協力のもと年間を通じて院内似顔絵セラピーを開催することができ、職員と患者の笑顔溢れる企画となっている。

新たな地域連携の取り組みとして心不全早期発見プロジェクトを立ち上げ、沼田利根医師会へ案内して紹介患者の受入れを開始した。

診療報酬改定では地域包括ケア病棟の新たな施設基準に対応した。長年課題としてきた看護補助者夜間配置加算を届出することができ、コロナ患者受入による特例的加算の算定や新入院確保・手術件数・分娩件数の増加などにより、黒字確保・予算達成を遂行した。

BCP具体化の取り組みとして10月に大規模水害に対する災害訓練を実施した。行政や他の医療機関の協力を得て実践的な訓練となった。

■2023年度の目標・課題

1. 新型コロナウイルスの5類感染症移行に伴い、新たな診療体制のあり方を構築する。
2. コロナ5類移行後の経営対策として、患者確保、診療単価アップ、経費削減の具体化に取り組み予算達成を目指す。新たに診療プロジェクトを推進させ、広報活動にも力を入れる。2024年度の医療介護ダブル改定に向けて準備に取り組む。
3. 診療体制を継続させるための医師確保に取り組

む。2024年度施行の医師の働き方改革に対応できるようプロジェクトを立ち上げる。

4. 働きやすい職場、選ばれる病院づくりとしてメンタルヘルス、ハラスメント防止に取り組む。職員間の交流や地域住民・組合員との交流を可能な範囲で行う。

以上の4つの病院方針を掲げ、具体的な目標を定め取り組む1年とする。

医局事務課

主な体制

課長：丸山 和希
副主任：片山 裕美
職員数：15人（うち 医師アシスト 7人）

活動報告

■2022年度のまとめ

• 医師の確保

初期研修医6人、専攻医2人（総合診療科：1、内科：1）、スタッフ4人（内科：2、総合診療科：1、泌尿器科：1）の常勤医を新たに受け入れた。また外部プログラムから2名の専攻医を受け入れ、総勢67人の医局体制となった。

• 臨床研修の充実

11月にNPO法人卒後臨床研修評価機構（JCEP）の更新訪問調査を受審し、エクセレント賞を含めた4年認証をいただくことができた。

• 高校生、医学生への対応

COVID-19の流行状況に留意しながら、高校生医師体験や医学部入試対策の模擬面接講座を開催した。医学生の見学・実習では延べ61件の受け入れを行った。

• 医師の負担軽減

医師アシスト系の増員に伴い、医師事務作業補助講習会の受講者を増やし、事務作業における医師の負担軽減を図った。医師負担軽減委員会と連携し、医師の働き方改革施行に向けた検討を進めた。

■2023年度の課題

〈医師確保〉

リクルートサイトやSNSでの情報発信により力を入れ、初期研修医や専攻医をはじめとした常勤医師確保につなげる。また学会やセミナー等の機会を利用し、臨床研修・専門研修に携わる事務のスキルアップと制度の理解を深める。

〈医師アシスト係〉

常勤医師を対象としたドクターアシスタントに求める役割・業務内容についてのアンケート結果から、更なる医師の負担軽減や業務の効率化につなげていく。



▲ 利根保健生協
リクルートサイト



▲ 利根中央病院
初期・後期研修情報



▲ 総合診療科
facebookページ



▲ 研修センター
facebookページ



▲ 研修センター
Twitter



▲ 研修センター
Instagram

総務課

主 な 体 制

課長：林 俊彦
主任：武井みゆき
副主任：高橋 陽介
職員数：16人

日本学会等認定資格

日本医療情報学会認定医療情報技師	2	高橋 陽介・大野 秀彰
------------------	---	-------------

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

総務課では、医療材料管理業務・人事管理業務・設備管理業務・庶務業務・電話交換業務・院内リネン業務を行う総務係とシステム管理業務を行うシステム係で業務を行っている。

設備維持管理は関連業者と連携し大きな問題はなかった。医療材料に関して価格高騰がありSPD業者と連携して商品の切り替えなどで経費の圧縮を図った。医療機器購入に関しては高額機器に関しては一定程度の交渉による値引きが図れている。その分決裁に至るまでの時間を要している現状の改善を図りたい。委託業者は滞りなく運用ができていたと考える。

大きなシステムに関する事故はなかった。ランサムウェアなどへの対策強化のため、現行のネットワークセキュリティ調査を実施し更なるバックアップの構築を行った。

■2023年度の課題

働き方改革への対応も含め勤怠管理の推進と総務課の業務効率を目指す。昨年度に引き続き医療材料・光熱費など価格高騰に対して経費削減などの取り組みを行うと同時に経営に必要な精査された情報を報告できるような仕組みを作っていきたい。新病院に移転し8年が経過したことから、建物、設備などの再点検など行う。

院内のシステム関連では情報共有ツールを使った運用の推進を図りつつ、職員への情報セキュリティ周知を図っていきたい。システム係に新たな職員が入職予定の為、教育体制の構築を図り、システム担当要員の強化が行われるようにしていきたい。

外来サービス課

主な体制

課長：綿貫 敦史
主任：有坂 典子
副主任：高橋愛由美
職員数：19人

活動報告

■2022年度のまとめ

- 2022年4月は新入職員を1人迎えた。毎年恒例の人事異動、入退職が多くあった。教育の場として、新たに配属された事務職員教育に努めた。配属2年目以降の若手事務職員も自立し、総合的な能力向上もあった。具体的には、タスクシェアリングを推進し、残業の偏りを防いだ。一つの業務に対する属人化を防ぐことによって、年休取得の推進を実施した。
- 午前中の検温業務が終了したが、発熱外来の事務配置、詳細な入館管理の実施等、新型コロナウイルス感染対策業務は継続を実施された。利根沼田地域のコロナ感染状況に応じて、発熱外来への時間外での事務員配置、小児科外来へ午前中の事務員配置を実施継続した。
- 新型コロナウイルスの流行によるCOVID-19に関する診療報酬上の臨時的取り扱いが公示され医事システム面等の対応があった。新型コロナウイルスの流行による患者数増加やそれに伴う保険請求業務の煩雑化、診療費の患者自己負担分請求業務に苦慮した。職場内学習、課題解決等すりあわせが困難な状況となり、レベルの維持・スキルアップを目標としていたが職員ひとりひとりのレベルアップまではたどり着けない年であった。新型コロナウイルスが世界中に広まり始めてから、職員の感染や濃厚接触による業務停止なども複数回経

験し、新型コロナウイルスが1番身近に感じた1年だった。

- 利根保健生活協同組合の更なる発展、成長を常に念頭に置き、時代の変化とともに次年に繋がる取り組みを提案、実行した1年だった。

■2023年度の課題

- 人員の定着が課題である。前年度に引き続き、業務水準の維持を目指す1年となる。与えられた状況の中で、法人全体の効率化を意識しながら、業務の精度維持・向上が大きな課題となる。職員の出入が多く、職員が固定化されないため、質の維持を第一目標とする。保険請求に対し返戻・減点を減らし、また算定漏れのない正確な保険請求を追求する。引き続き職場内学習に意欲的に取り組み、診療報酬に対する知識を深め、他職種との連携をとり情報共有をしていきたい。

今年度もコロナ禍の状況で感染予防と利根沼田地域で利根中央病院果たす役割を意識しながら、課題の克服に取り組みたい。

入院サービス課

主 な 体 制

課 長 : 西村 樹
副 主 任 : 糸賀 諒輔
職 員 数 : 14人

日本学会等認定資格

診療情報管理士	8	西村 樹・森田 由美・岡部 菜月・吉田 達哉・西山 未来 牧野 昌広・稲垣 秀行・小菅茉那歩
---------	---	---

活 動 報 告

■2022年度のまとめ

- COVID-19陽性患者の入院受け入れが増加し、高額な請求が増えたため、慎重に点検作業を行いながら業務を行った。
職場内でも陽性者や濃厚接触者となる職員がでたため、頻回に人員不足となったが、協力して業務を遂行することができた。
- がん登録、NCD（外科・循環器）、JND（脳外科）は100%登録を継続することができた。
- 退院後14日以内サマリー作成率90%以上を維持することができた。
- 新入職員1名の受け入れがあり、職場全体で教育をすすめた。
- 診療情報管理系の職員異動に伴い、中途採用者が配属となり業務の引き継ぎを行った。
- 新たに1人が診療情報管理士を取得。中途採用者も資格所持者であり職場内の半数以上が有資格者となっている。

■2023年度の課題

- コロナ特例が廃止となり、単価減が予想されるなかで、疾病や医療行為に対して学習し、取りこぼしのない正確な保険請求を追求していく。
- 病棟配置事務職員の立場を生かして情報提供を行うと共に、チーム医療の中継点として機能できる存在を目指す。
- 医療機能評価で指摘された診療録の質的監査方法を確立していく。
- 子育て中の職員もおり、育児や家庭と両立しながら働けるよう職場環境を整える。

総合支援センター

主な体制

室長	：	原田 孝
副看護部長兼看護師長	：	宮本 笑子（看護師）
事務課長	：	小崎 領（事務）
主任	：	荻野 秀樹（社会福祉士・精神保健福祉士・公認心理師）
副主任	：	鈴木真紀子（看護師）
職員数	：	16人（うち看護師5人・准看護師1人・社会福祉士7人・事務員3人）

学会等認定資格

緩和ケア認定看護師	1	鈴木真紀子
公認心理師	1	荻野 秀樹
3学会合同呼吸療法士	1	宮本 笑子
キャリアコンサルタント	1	小野 節子
衛生工学衛生管理者	1	小野 節子
第1種衛生管理者	1	小野 節子
介護福祉士	1	武井 律子
社会福祉士	7	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・萩原めぐみ・室田 翔斗・水越 結衣・小野 節子
精神保健福祉士	2	荻野 秀樹・武井 律子
介護支援専門員	4	小野 節子・武井 律子・金井 智弥・荻野 秀樹

活動報告

■2022年度のまとめ

・地域連携部門

前年度に続きコロナ禍で訪問型の営業はできなかった。沼田利根医師会症例検討会は当院を会場として2回（6 / 14、11 / 22）それぞれ2演題として時短型での開催であった。当院主催によるオープンCPCは3回（6 / 20、12 / 19、3 / 20）開催。

5回の延べ参加者は院外医師26人、院内医師74人、医師以外（院内のみ）48人の計148人であった。医師への返書作成依頼を計画的に行い、未返書数の改善が進んだ。紹介率は前年度同様、発熱外来、スクリーニング検査の患者増加により、分母である初診患者数が大きくなり、前年度月平均16.3%から14.7%へとポイントが下がった。逆紹介月平均は

昨年度17.7%から17.7%で横ばいとなった。

・相談支援部門

社会福祉士が1名9月末に異動となったが、11月に別の部署より社会福祉士を迎え入れ全体の人数の変更はなかった。

相談件数は9,418件（前年度11,383件）、COVID-19による病欠や自宅待機などで勤務可能な職員が少ないことが何度かあったためか全体の相談件数は前年度より減少した。ただし、新人教育をしながらも職場内でフォローし合い、前年度よりも退院支援加算の算定数を増加することができた。

介護連携指導についてはコロナ禍でケアマネジャーと面会しての情報共有の場自体が少なく昨年度同様少ない件数となっている。

また、記録の入力方法について見直ししPC増設等対応したことで時間外短縮できた。

・入院センター部門

2～3名配置。入院前からの患者支援を実施することで、円滑な入院医療の提供や病棟業務負担の軽減等に取り組んでいる。安心して療養生活が送れるよう、入院前から支援させていただくことを患者・家族に説明し、療養支援計画書を立案、受け入れ病棟職員、社会福祉士、退院調整看護師と情報共有をしている。また、薬剤の確認にあたっては、薬剤師と連携を図っている。入退前支援加算91件前年比（96%）コロナ禍、入院される患者の事前の体調管理の協力が必須であり、書類や説明内容の工夫に取

り組んだ。

- ・総合支援センター内の連携でベッドコントロールの情報を元に退院調整に協力した。

■2023年度の課題

・地域連携部門

紹介された患者について紹介元の期待に応えられるよう対応し、しっかりとお返事を返すという基本を徹底していくことが他医療機関からの信頼を深めることに繋がるという認識を踏まえて業務を進める。経営分析ツールであるダッシュボードXの活用。

沼田利根医師会・利根中央病院情報交換会の開催。

・相談支援部門

加算の算定を漏れなく取れるよう仕組みを継続して見直していく。

職能団体の研修への参加や精神保健福祉士の資格取得など個々のスキルアップを図っていく。

マニュアルの見直しや整備を行業務の効率化を図っていく。

・入院センター部門

入院前からの支援、退院後を見すえた一貫した支援を行いつつ、院内の入院センターとしての役割を更新する。

項目	2021年度	2022年度	前年度比
退院支援加算（700点）	1,211件	1,474件	121%
介護支援連携指導料（400点）	57件	45件	78%